



特定非営利活動法人アートフル・アクション

はじまるみづで

はじまるなみ



はじまるている



未来のタマのカーニヴァルへ

タマのカーニヴァルは、二〇一三年度東京都多摩・島しょ広域連携活動助成事業 子ども体験塾事業として、小金井市を中心に、武蔵野市、三鷹市、国分寺市、国立市の五市の小学生を対象におこなった活動です。おおよそ二週間に一度、七ヶ月にわたって毎回一〇〇人ちかくの子供たちと音楽家、サーカスアーティスト、人形師、ダンサー、地域のボランティア、学生等が音楽やダンス、造形活動をおこない、二〇一四年二月に小金井市内を練り歩き活動を終えました。

この活動は、当初より音楽教育や造形教育などの専門教育を子供たちに授けることを目的としたものではありませんでした。たくさんの子供と大人が音楽やダンスの下に出会い、ともに時を過ごす中で、今この時を生きている喜びや新しい気づき、躍動感がリアリティをもって立ち上がる一瞬があるかもしれない、あるいは人と音楽の根源的で豊かな出会いを体験する機会が持てるかもしれない、という願いに基づいていました。

その中で大切にしたいと思ったことは、この活動は大人が、あるいはアーティストが子供に何かを「与える」ものではないということです。与える者としての大人、与えられる者としての子供という構図に、何かしらの胡散臭さや危うさのようなものも感じていたのかもしれませんが。毎回、ディレクターや音楽家、ボランティアが子供たちの顔を見ながら活動プログラムを確認し、活動が終わっても帰らない子供たちの喧騒を聞きながら振り返りの会をおこないました。各回の活動は出来事に満ち、楽しい時間ではありましたが予期せぬこともたくさん起こりました。

途中、子供たちはこの大人たちの迷いや逡巡を見透かし、見逃し、許し、乗り越えていきました。その、一見すると騒々しいだけに思えるような子供の中にある研ぎ澄まされた知性と優しい振る舞いは、与える対象としての子供、をはるかに超えていました。そしてうるたえ逡巡する大人の姿を子供たちの前に露呈させつつも、ともにあったからこそ、肅々と予定をこなすワークシヨップにはない問題点、弱さ、揺らぎが明確になりました。

本質的な意味での音楽を問うことは、生きることを問うことにもなります。それはとりもなおさず、今を生きる私たち自身をも問うものでもあり、同時に子供たちが置かれた複雑な今をあぶり出すものともなりました。

この冊子は、この間の出来事を時系列や起承転結で説明する構成になっていま

せん。

タマのカーニヴァルでは多くの子供たちが関わるゴールのわからない場を運営する試みを、どのように記録し、記述することができるのかということもひとつのテーマだと考え、膨大な量の写真、映像を残しました。また、子供たちの心の動きを知りたいと「タマのカーニヴァルのノート」をつくり、希望する子供には家で書いてきてもらうことも試みました。

会期終了後、活動に参加したミュージシャン、市民のボランティア、学生の有志による数千枚に及ぶ写真を見る機会を何回か設けました。写真が映し出されるモニターの前に、楽しかったこと、共有したい発見、驚き、不満や不安、活動が終わっても腑に落ちないこと、ある時ふと腑に落ちたこと、様々な言葉が飛び交いました。それらができるだけ恣意性を持たないように拾い上げ、百語を超えるワード群にしました。その群の中から、この活動を端的に性格付けるものを抽出しキーワード文章のタイトルとしました。

活動に参加したミュージシャン、市民のボランティア、学生に、そのキーワードから想起されること書いてもらうよう依頼しました。執筆にあたっては、誰かの意図による趣旨のはっきりした依頼原稿を書くのではなく、書き手の職能にこだわらず、さらに一面的な因果関係に引きずられないように、宙ぶらりんのキーワードについて書き手がそれぞれの思いでとらえ、書きたいこと、書けることを書くことを願いました。

原稿の並びも、時系列、あるいはひとりの人にとっての物語、起承転結ではなく、さらにキーワード間の相互関係もできるだけ排除するように努めました。小さなつぶつぶを散乱するように布置し、それぞれが光を放ち、読み手、読む時によつて異なる面を見せることを意図し、中心性、すなわち強い権力の構造を持つことを極力避けようとしたこの活動の考え方を、この冊子でもできるだけ再現したいと考えました。

そこには矛盾や限界があることは、編集作業にあたった私たちも十分に自覚してはいます。参加した子供たちにとってこの活動が、遠い将来もしかしたら何か小さな形を結ぶかもしれませんが、あるいは結ぶことはないのかもしれませんが。けれども、従来型の明確な答えのあるパッケージ化された「子供」相手のワークシヨップではなく、多くのためらいと迷い、試みを繰り返しつつ、子供たちと相対し何かを模索した軌跡として、また、新しい方法論をさまざまな立場で追い求める過程のひとつとして、この方法／この冊子を取りまとめ、次の機会を構想するために参照される資料とすることは、単なる感傷をこえた意味を持つかもしれないと考えました。参加した子供たちへの深い感謝と皆さんとの新しい出会い、対話のきっかけになること、この言葉の束が遠くまで歩いていくことを祈って。

二〇一五年秋

宮下美穂(NPO法人アートフル・アクション)

音とダンスが近づいてくる	亀田奈美子 06
始まるようではじまらない、でも始まっている	藤本陽子 08
親が見に来る	猪股桃絵 10
のっぺらぼう	藤本陽子 12
譜面がないとできない	亀田奈美子 14
身体に残るリズム	田中みさよ 16
休み時間	亀田奈美子 18
勝手にのおのおが動いている 好き勝手の満足感	中根久寧 20
コール&レスポンス	田中みさよ 22
ときどき思い出す	藤本陽子 24
回転寿司	伊藤安寿華 26
身体に残るリズム	猪股桃絵 28
帰らない子供たち	加藤日菜子 30
タマのカーニヴァルのノート	宮下美穂 32
休み時間	井上麻衣子 34
タマのカーニヴァルのコード	伊藤安寿華 36
親が見に来る、声が響く	田中みさよ 38
飽きる 飽きたその先	中根久寧 40
全然ちがう子供の話	澤和幸 42
多中心性	村田亘 44
休み時間	加藤日菜子 46
少年たちへ	宮下美穂 48
音とダンスが近づいて来る	猪股桃絵 50
こどもしんぶん	鈴木佳子 52
パレードとの連続性は？	亀田奈美子 54
タマのカーニヴァルが行列をしたということ	宮下美穂 56
始まるようではじまらない感じ、でも始まっている	田中みさよ 58
タマのカーニヴァルはけの森展	宮下美穂 60
遊びか祭りか	金井圭介 62
飽きることからまた始まる	澤和幸 64
寄る辺の無さ、無形の岸を遠くまで歩くこと	平井航 68
多面体プロジェクトが放つもの —「ゴール」に帰結しないホール発表	小上文加 70
アートを超えていく時間のこと	戸館正史 74
タマのカーニヴァル 開催の記録	— 78

🍌マークの文章は、ボンこと制作の戸館正史が
キーワードやテキストについての私見を記述しています。



音とダンスが近づいてくる

亀田奈美子

何かやるべきことが目の前にないような時間は、みんな思い思いに過ごしていた。座っておしゃべりを楽しむもよし、気になる大人に絡むもよし。そんな中でモモちゃんが踊り始めるとその輪はパッと広がり始める。踊りに加わる人、踊りに合わせて太鼓を叩く人、楽器を弾く人。ダンスの動きには音が似合う。いやいや、踊る人たちは鳴ってはいない音楽を聴きながら踊っている。見ているとその音が聴こえて来るのもの、なんとなく勝手に演奏したくなってしまふ。

私はそんな音楽を奏でるものひとり。楽器は毎日触れているけれど、ダンスなんて学校の体育の授業以外で踊ったことはない。明らかに自分の体の中のない「ダンス」という語法を見て、驚きやら眩しさやら、まるで動物園にでも来たかのような珍しさやらを感じていた。そんな「珍しさ」は子供たちにとっては魅力で、あつという間に楽しそうに、そして自然に踊っている。ああ、自分はとてもそんな風に心から踊ることができる。ああ、自分はとてもそんな風になつていく中で、クラシックの楽器を習った人間なら、例えば拍を感じて演奏するのに足などをポンポン動かすのもあまりおススメできる行動ではない、と習うように、音楽から感じたものとはかく音で出す、というのがちょっとしたルールになつている。ダンサーたちを見て音と体が直接つながっていることに驚きまくっている人間は、もしかしたらそう多くはなかったかもしれないけれど、みんな何かしらに対して驚きを持って過ごしていたのは同じだろう。自分の中にはないものと出会い、向き合う場面の多さったら、タマのカーニヴァルはそんなことの連続なんだから。

もちろん私たちは何か変化することを求められているわけではなかったのだけれど、幸い七ヶ月という時間お互いに付き合えるチャンスを持っていた。その時

間は友情を生んだかもしれないし、お腹に抱えた違和感を見つめることで自分自身を理解することにつながったかもしれない。違うと判断したものがまったく違っていかなかったというドラマチックな展開だった。そう、ダンス。時間の最大の作用は慣れること、かもしれないけれど、慣れて馴染んでいくうちに、眩しさはそのままに、珍しさは消えていった。こんな風に輪が広がることもあった。タイチ君がなんとなく弾き始めたベースのフレーズに楽器が次々加わっていく。パーカッション、ギター、フルート、そこにどこにいたのかさらにモモちゃんのダンス。まるで楽器のひとつであるかのような自然な加わり方。あるいは「タイコの歌」。踊りの練習が始まれば音楽がもれなく付いてきて、音楽が鳴り始めると踊りが自然にスタートする。班分けして取り組んだ最後の発表でも、「踊り班」「歌班」はなんだかんだですつとそばにいた。

音とダンスは兄弟のようにいつもセットでやってくる。ガヴォット、ブーレ、アルマンド、はるか昔からそうだったことは譜面台の上の楽譜たちを見て知っていたはずじゃないか。むしろひとつのものとして同時に生まれたんだ、ということも知っていたはず。それが、世界が大きくなった、というか、自分が狭くなったというか、一方に限ってこたわっているうちに、もう一方を遠いと感じてしまったのか。せつかく知識は持っていたのに、踊りとセットになったとき即座に「おお兄弟よー」と感じられないあたりが悲しいところ。私の感覚の鏡の曇り具合ではじわじわつながらのが関の山なのだ。それでも知識と感覚が一致した瞬間は特別なすつきり感が味わる。ダンスに操られるような、踊る人たちを操っているような不思議な一体感をすつきりした頭で味わる、このありがたさ。





藤本陽子

始まるようで始まらない、 でも始まっている

「Everybody talk about freedom freedom」

こんな感じのラップ調の歌を口ずさみ、そして顔合わせと称してシャトーに集まっているひとたちにこれを一緒に歌ってみよう、とミナトさんは言った。
インターネットやツイッターなんかクソくらえ！ といった歌詞だった。

パソコンやテレビ、電子レンジさえ持たない私はおおいに感動し、
今のご時世そんなことを大声で叫ぶ人に出会えたことを喜んでいた。

ミュージシャンやパフォーマーたちによる長期間の子供向けワークショップ？

「原始的」がキーワードらしい……

私は音楽にダンスに大道芸などの要素も取り入れると聞き、サーカス↓シルク・ド・ソレイユのようなものを思い描いてわくわくしていた。

時間もたつぷりある。なんでもできそうな気がした。

しかし、一向に始まらなかった。

というか、始まっていたが、なにも作り上げようとはしていなかった。

子供たちは午前と午後に別れて集まって、ホールや体育館などで二時間ばかりを過ごす。

とりあえずミナトさんが作った「タイコのうた」を覚えたり、言葉遊びの念仏のようなものを覚えたり、踊りを覚えたりした。

なんとなく一輪車や皿回しなどを練習し、なんとなくそうして季節は過ぎていった。

作ったものはタイコやパレードで着る衣装。

どうやら、仮装してタイコを叩きながら町を歩くパレードをすることだけを目的にしているらしい……そのことに気がついたのはずいぶん後になってからだった。

なにかを作り上げることよりも、いろいろな子供や大人とゆったりと時間を共有し、それぞれの居場所を見つけることを優先していたような感じだった。親や、大人を喜ばすだけの発表会はしたくない、という雰囲気もあった。

私はひどくがっかりした。

こんなにたくさん様々な可能性を秘めた子供たちや、

音楽やパフォーマンスに秀でたメンバーがいて、こんなに時間があつたのに……

結局、パレードのひと月半くらい前に、交流センターのホールで何か発表をしよう、ということになった。私は詩の朗読のチームのサポートに入った。が時間もなく、大雪などで子供も集まらず、発表は即興に近いものになった。

それはそれなりに作りこんでいない良さが出ていたとは思いますが、朗読チームの子供たちにはもって達成感を味あわせてあげたかった。



親が見に来る

猪股桃絵

子供にとって、親が見に来るといことはポジティブな面もネガティブな面もあると思います。子供は、親が居る場合と親が居ない場合では態度が異なります。この活動中もそのような場面を何度か見ました。さっきまでわがまま言っていた女の子が親が迎えに来るとすましていたり、いつも暴れ回る男の子が急に落ち着くなったり。これは、きっと親の期待にできるだけ応えようとしているのかなと思います。そのため、親に良い所を見せたいから失敗を恐れて挑戦できずに行動を制御してしまうこともあると思います。実際、何もできない参加者の子供に、その親が色々アシストしようとするけれど、ますます何も手を出せなくなっているシーンに何度か遭遇しました。きっと親の示す方向性と子供の中にあるものの方向性が、子供自身何か違うと感じ、親と自分自身の狭間にたって立ち往生してしまうのだらうと思います。

しかし、その親の期待に応えようとする力が原動力にもなっているんだなと感じたこともあります。自分の作った衣装を自慢げに親に見せる子や、今日は親が見に来るから衣装もつとこうしたいと最後まで色々悩んでいた子など、喜ばせたい相手がいるからより素敵なものを作ろうと工夫をしたりするのだらうと思います。

このように親という存在は子供たちの行動に様々な影響を与え得ます。その中でも、子供が楽しく活動に参加するひとつの方法として、親もその活動を味わい知って楽しむということが挙げられるのではないかと思います。実際、子供を見るためだけでなく、親自身楽しむためにワークショップに来ている親子は、共にワークショップを楽しんでいた印象があります。

それを考えると、もしかすると学芸大学の親を招いての中間発表はその後のワークショップに何かしらの影響をもたらしたのかもしれない。学芸大学中間発表は、親と一緒に大行列の練習をしたり、ホールでは「タイコのうた」の踊りを最終的には親も一緒に巻き込んで踊ったりしました。きっと親自身がタマのカーニバル自身を楽しんでいる姿をみれば、子供は親と体験を共有できる安心感を感じ、伸び伸びと活動に参加できるのではないかと思います。また、親の方も子供がしていることを知り安心感を持つことで、その安心感自体が子供に安心感を与えるのではないかと思います。親を呼ぶ日をつくり活動を知って体験してもらうことも、子供が楽しく活動に参加するためには意義のあることかもしれません。





のっぴらぼう

藤本陽子

人の顔と名前を覚えることが極端に苦手な私は、冬になってもまだ受付で

「えっと、だれだっけ？」
をくりかえしていた。

良くも悪くも個性的な子はなんとか顔だけは覚えられた。

しかしほとんどの子供たちは、ふんわりとしていて、あたりさわりなく空間を共有するだけだった。

これではなかなか覚えることは難しい。

頼りのネームプレートも付けていなかったり、ひっくりかえっていたりする。

その子の名前を呼ばなければ、自分もその子に呼ばれることもない。

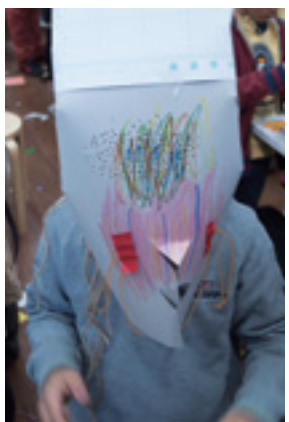
タマのカーニバルはのっぴらぼうの集まりのようだった。

最終日のパレードで、自分の顔を白く塗り、ひげを描き、「猫のタマ」になった時、
やっと「はあちゃん」と子供たちに認識された気がした。

私もずっと、ただふんわりと存在していただけだったんだとわかった瞬間だった。

☂ 匿名性—私たちが毎日生活をしている営みには、ご飯を食べたり、歯を磨いたり、うんちをしたり、お風呂に入ったたり、掃除をしたり、おっぱいを飲ませたりといるいるあります。それぞれまったく異なる人間が似通った営みをしているのが人間だったりします。そういう共有している営みがあるからこそ、言葉や価値観が違ってもおなじ世界でみんなが生活できていると考えたならば、タマのカーニバルで繰り広げられている音楽も夕

ンスも、みんなが共有している営みのひとつであってよいはず。そこに特別な価値づけはいらぬはず。つまり「これがアートだ！」なんて言ってしまったら、たちまちそれは誰かの特別な有名性の表現になってしまいます。だからタマのカーニバルの何気ない時間にあつた体験のすべては生活と地続きの匿名性のそれだったのかもしれないです。





譜面がないとできない

亀田奈美子

本番前。会場に入ると自分の譜面台にペロッと文字ばかり書かれた譜面が回ってくる。そこへ港さんが申し訳なさそうに近寄ってきて、「あのー、それー今からやる曲なんですけどー、ちょっと一度聴いてみてもらったほうがいいですかね？」またまた来ましたが、この状況。申し訳なさやら冷や汗やら、自分は毛穴からそれはそれはいろんなものが出てくるのだけれど他のミュージシャンは至って涼しい顔。譜面に書かれた文字は「コード」と呼ばれるもの。主にジャズやポップスなどで使われている。音の積み重ね方を一目でわかるようにした便利なものだ。積み重ねた音はハーモニーになり、そのハーモニーとハーモニーは大体お約束に従って数珠のようにつながられている。涼しい顔をした人たちはそのコードを自分の語法にしている。一方の冷や汗たらたらな自分はいわゆるクラシックの、びっしりおたまじゃくしが書き込まれた譜面にしか対応できない。

ほとんど言い訳だが、この状況でこんなにアウェーな自分は世間一般的にはメジャーな部類に入るに違いない。楽器を習えばもれなくおたまじゃくしがついてくるでしょう？ 音符は「あいうえお」に相当する文字であり、楽譜は作曲家からの手紙。手紙をなるべく書いた本人の意図したとおり読み上げるのが大切で、練習の末に作曲家の手紙が自分の言葉になって出てきたとき、自由や喜びを感じていた。実はコードもなんとか読めるし、数珠のつながりのお約束もクラシックの世界で一応体験している。大きく違うのは誰かの言葉（初めのうちは）借りて表現するのと、自分の言葉で表現するのとという点だ。瞬間的に作曲をしているともいえるだろう。自分の言葉でこの瞬間にどうやって表現しようか、なんてトレーニングはしていない。涼しい顔の人たちは音符なんて読めないと言う。それでこの自由さ！ 音符なんて読めない、の言葉は既にうらやましいフレーズに聞こえ始めていた。

そもそも自分に「自分の言葉」なんてあるんだろうか？ 書かれたものを表現する、その表現に自分の好みや理想ならたくさんあるのだけれど。聴いてくれる人がたくさんいることに対してではなく、出すものがない！ というこの怖さ。怖がってこの場に立っているだけでは自分がここに意味なんかないんだぞ、

と自分のお尻を叩きながらとりあえず自分の中のスイッチを探す。

だけどドラマや漫画のように、「スイッチ発見、パチッ、はいさらさら出てきました！」とはやはりいかないものだ。それに自分が長い間作ってきた音質、リズム感、フレーズ感なんかもこの場にふさわしいようにはとても思えない。あきらめよう。かつこい何かを吹こうと思うのは、するとあきらめはおもしろいことに怖さをやわらげてくれる。だって仕方ないじゃない、できないものはできないんだもの。そして次第に開き直りになっていく。大好きな音符も、せっかく少しは読めるコードも手放して、ただ音を聴く。すると時々ありがちで、ダサダサなだけど何かのフレーズが聞こえてくる。よし、とりあえずこれを吹いておこう。

ひらけひらけ、自分。とんでもなくダサイ上、時々素っ頓狂で迷子な音が混ざってもお許しを。楽器を始めたとき、いや、その前から楽譜が好きで好きでしようがなかったわけではない。音楽が好きだったから今まで続いているだけ。その好きな音楽をこのステキなメンバーと、そしてこのキラキラした子供たちと楽しめないうちに残念すぎる。パートと自分の放った高い音が空間に散っていき、たくさん声や音や踊りと混ざっていく。カンとノリだけでつくるアドリブに未来はないのは分かっています。いつかちゃんと自分の言葉を紡げるようにトレーニングしますから、今日のところはどうぞご勘弁！

🌂 譜面がないということー近頃、クラシック音楽のミュージシャンたちが学校等へのアウトリーチ活動などに熱心ですが、お約束重視の腰の重さゆえに普段の音楽の授業と何が違うのだろうという現場を目撃することがあります。子供たちのコール&レスポンスが予定調和で終わっているのはちょっと悲惨な光景です。

フルーティスト・亀田さん⇨カメちゃんは、タマのカーニヴァルが始まる前、ずいぶんとナーバスでした。それはこのテキストに書かれている通りでもっともな話です。港さん率いる森の楽団は、タマのカーニヴァルの一環として小学校への訪問演奏&ワークショップをおこなってきましたが、年度も終わるころにはカメちゃんはずっと前から港さんのバンドにいるかのように馴染んでいました。「譜面が好きなのは音楽が好きなんだ」というカメちゃんの言葉は、復古的で学究的な演奏に終始しているクラシック演奏家に聴かせたいものです。





身体に残るリズム

田中みさよ

実はずっとあった、実はずっと自分と一緒にあったものなのではないかと思えます。

ワークショップの中でワークとして触れたものや、その場で新しく生まれたもの、に引き出されたようなものだと感じました。

そして、それが、タマのカーニバルが終わってからどこか自分の中で響いていること、バウンドしつづけていることについて。

それは、自分の体を、本当に震わせてる体験の中で形をとって意識されるものです。

リアリティを持った出来事。頭や意識のはつきりとした範囲からはずれてしまっても、また何か刺激があれば、ぼろっとその形だけが思い出されるのだからなと思います。

身体の、リズムの記憶。

新しく、深い体験は、自分の想像のレベルをひとつ押し上げると思えます。

リズムという波の形をとって、遠い昔の身体ともつながるこの、こと。

リズム—規則性をともなう動きや点
が打たれたりするリズム—律動は、身体で覚
えるものとされます。あるいは身体に刷り込
まれているものでもあります。三拍子で手を
叩く輪の中で、四拍子で手を叩くグループを
放り込んだとき、異なる拍子が共存するポリ
リズムが生まれますが、これをやると必ず混
乱する人が出てきます。いま自分が叩いてい
る拍子と周りの異なる拍子に頭が反応して
しまい考えてしまったら混乱が生じます。繰
り返すうちに考えずとも身体が規則的に反
応するのは、まさに身体でリズムを覚えたとい
うことになりました。「タイコ」をみんな
で踊ることはまさにそういうことだったの
でしょう。

でもタマのカーニバルで大事だったこと
はそんなことではないのかもしれませんが。呼
吸や話すスピード、寝る時間や起きる時間、
早く歩いたり遅く歩いたり、そんなそれぞれ
の異なる律動に加えて、歌ったり歌わなかつ
たり、踊ったり踊らなかつたりする子供たち
や右往左往する大人たちが共存している時間
がタマのカーニバルのリズムだったのでは
ないでしょうか。輪の中で三拍子と四拍子が
共存するとき、このふたつの拍が一致する瞬
間が規則的にやってきますが、タマのカーニ
バルのリズムは、数学的に割り切れるはず
もなく、いつみんなのリズムが一致するかな
んて誰にもわかりません。本来ならば点であ
るはずのリズムですが、みんなのリズムが重
なったり、リズムとリズムの間隙をついたり
することで、リズムが線となり面となるかの
ようなクラスター状態が出来上がっていきま
した。だからタマのカーニバルでは参加者
全員のリズムが一致する時間なんてなかった
かもしれません。でも田中さんが言うように
「何か刺激があれば、ぼろっと」タマのカー
ニバルの実感が、何十年後かあるいは数年
後かわからないけれど、木の葉が落ちるよう
に、それぞれのタイミングで降ってくること
があるはず。そういうほとんど天まかせ
のリズムの集積がタマのカーニバルでした。





休み時間

亀田奈美子

目まぐるしく回る毎日を過ごす中で、「オンとオフの使い分け」がきっちりできることはとても良いとか好ましいとされているように思うのだけれど、タマのカーニヴァルでは良くも悪くもオンとオフがゆるくながる。むしろ使い分けなどそれほど大切ではないよ、といわんばかり。きつと小学生だってみんな忙しく、あっちゃこっちのスケジュールを調整してがんばって活動に参加してきてくれていたはず。アーティストやスタッフなどのたくさんの大人たちもそう。ぎりぎりセーフ！ はい、着いた！ あらら？ でもみなさんいったい今から何をするところなの？

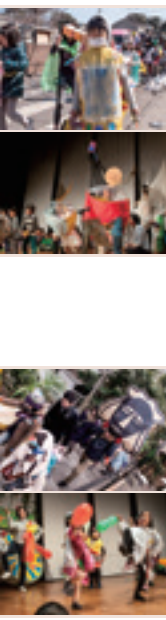
よく分からないのには二つ理由があったかもしれない。ひとつはワークシヨップ自体誰かが前に立って全体を牽引して、というスタイルではなくて（もはやそれはワークシヨップではないかもしれないけれど）あっちにもこっちにも動きの中心点があるようなスタイルだったということ。おしゃべりも多いし、実は良く聞くと一応内容に関係したおしゃべりだったりするけれど、そもそも今進行している活動からまるつきり外れてしまった子もいて、案外そこが楽しく膨らんでいってしまうことも多々あるから、くーっと集中している状況ではなくて、ゆるゆると時間が流れているような状況に見える。またもうひとつは休み時間。ゆるゆると進行していた活動は、はい、ここまで、と言われても意外とそのまま練習や制作を続けてしまっても平気だったり、活動中に気になったものを今がチャンス！ と手の空いた大人に近寄って触らせてもらったりと、要するに休み時間も学びの姿勢はそのままなのだ。もちろんそれがほとんど全員というわけはなくて、ぱつと解放されたように走り回り、（主に澤さんを追いかけ回す）乗ったり押ししたり引っ張ったりと遊びらしい遊びをする子もたくさんいる。でももしかし

たらそれが楽しくて活動に毎回来ている節もあるの
で、オン、オフで言うなら本人にしてみれば今こそオ
ンタイム！ なのかも知れない。

でもこの二つが大きく違うのは、なんといっても休
み時間は「自由」だ、ということだろう。自分の気の
向くままに今から過ごす時間で何をするか決められる
なんてステキ！ あの大人げない大人たちをからかっ
て遊ぶもよし、部屋の隅で座ってしゃべってもよし。
今弾ける曲をあそこのピアノまで行ってちょっと弾け
るか試してみるのもいいし、あそこで踊りを練習して
いる人たちに加わるのもいいな。チェロを触らしても
らおうか？ 特別大きなあの太鼓をドンっとやってみ
たいな。近づきたくなかったものに勝手に近づけるって
やっぱりステキ。ひらめきや気まぐれのまなざしは、
目の前にいる人やものたちに対して向けられる。

そういえば活動の日はそもそも子供たちにとっては
学校がお休みの休日なのだ。そのお休みをタマのカー
ニヴァルに来よう、と選択したのも多分ほぼ彼らの意
思だったのでないだろうか。休み時間は自己表現の
時間、なんて言ってしまうとそんな立派な感じでもな
いのだけど、やってみたい、をかなえていくうちに、
自分のことが自分でもよく分かっていくようにも思
う。やってみたい、のその先に自分の未来がつかっ
ていることだってあるんだもの、やってみたい、が許
される自由な休み時間はたくさんたくさん欲しいとこ
ろ。もちろん「毎日が休みだったらいいのに」は子供
に限らず大人もよく口にするフレーズではあるけれ
ど。でも本当に毎日が休みにだったとしたらちょっと
怖いな、と感じてしまうあたり、自分は残念ながら普
通の大人になっているんだろう。

オフタイムの中のオフタイム。タマのカーニヴァル
の休み時間にはみんなのゆるーい意思が詰まっていた。





勝手にのおのおのが動いている 好き勝手の満足感

中根久寧

女の子たちは退屈してホワイトボードにお化けの落書きを始める。男の子はずっと太鼓を叩いている。「石や小枝で妖怪の操り人形を作り、怪談・歌を考える」というワークショップ中の光景です。

怪談を観る―グループに分かれ妖怪をイメージする―雑木林に材料を探しに行く―おのおの操り人形を作る―完成したらお話と歌を考える。という流れの中で、人形を作り終えたらまったく話し合いにならない。

それでも、女の子たちは話を考えようとしているのか「お化けに化けてむじなもびっくり」「あいうえおばけ」「おばけとなかよくなつた」などの言葉も書く。それ以上まとまりそうにないので、さわさんが草むらわを紙で作って舞台にして、みんなで踊ろうと提案。はあちゃんがせっかくだから「歌も作ろう」と提案するが「あいうえおばけ」の後が全然出てこない。

手話まり感のある中、私が「かきくけ○○○ さしすせ○○○」とつづけたらと提案すると俄然子供たちは乗ってきて歌詞が完成。

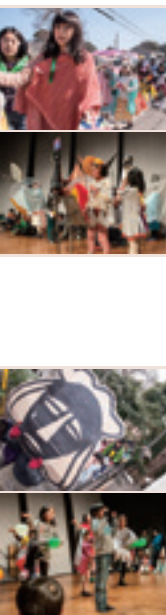
内容は男の子たちのパークッションに合わせて歌いながら人形を踊らせる。最後に「わいうえ……………おばけ!!」と叫んで逃げる。という形にまとまりました。逃げる時にスタッフが転んでそれを助けおこすという演出も入れ、気持ちの入った発表になりました。

表現の活動は、まず自己の表現をする。他者の表現を見る・知る。それに共鳴・共感し、他者を受け入れ共同で発表する。という風に展開する構造を持っています。自己の表現が充分にできていないと、なかなか他の人の表現に目を向けることができません。

「おはなしきもだめし」の活動は昼食を入れて四時間ありました。それは行き詰まって悩める時間も含めて十分な時間だったと思います。スタッフのファシリ

テートが功を奏した部分もありますが、子供たちの内側に（人形を作った）満足と、（話が作れない）不満があつて初めて形にすることができたのだと思います。全体像が見えてくると役割を振ったり、細かな演出も考えて入れたり全員で作品づくりに関わることでできました。

勝手に見える行動も、自己表現の満足感の表れであれば、それを次なる創造活動に向けさせられるのだと思います。





コール&レスポンス

田中みさよ

繰り返して、繰り返される物事と、ぱっ、くるっ、と変化する機。

実は底の方ですっと刻まれるリズムと。その上で、自分が、そしてそこでみんなで跳ね回ること。プロセスと、響きと。生まれている、ハーモニー、のようなもの。

たまに感覚をかすめる、きらっとしたものの。蠢いているぐるぐるとした感覚の存在。

いつも、いつもの様に動く事象が、違った秩序に乗って。まわっていくのを眺めるような感じと。そして呼ばれたような、私がかまえたような。

細かな、細かなものまで、何かに、ひっかかったように見えるような。

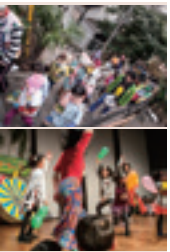
連続した、連続していく色々と。連帯していく色々と。

万華鏡を見ているような心地と。

あいさつの渦が、カーニバルなのかもしれないなあと思いました。

☂ コール&レスポンス—港さんの歌にはいつも掛け合いが用意されています。それは港さんにとって音楽はコミュニケーションの手段だからです。あるいは金井さんのお家芸であるパントマイムも、対象を模倣するという自分と他者の間のコール&レスポンスでしょう。港さんにとっても金井さんにとっても歌ったり踊ったりして表現するということは「あなたと私はここに一緒にいるよね」という確認をすることなのかもしれません。子供たちにとっても投げかけられてくるリズムや言葉を模倣して跳ね返すということ

は身体的な快感をとまいません。いわば音楽やダンスの力を使った扇動とも言えなくはないので、そこにはいつも危険が伴っているとも言えます。つまり思考することなしに自分の身体を煽り立てていくということは暴力的な行為にもつながりかねません。でも、他人の悲しいことや辛いことに私たちが反応するときも、身体が反応しませんか？ 胸の底がざわついたり、涙が出たり、手足が震えたり。そういう危うくて怖い身体的な感覚を抱きかかえながら、歌ったり踊ったりできるとよいのには思います。





とぎとぎ思い出す

藤本陽子

体育館にくると思い出す。

「くつをここに脱ぎっぱなしで、盗まれてもしたらどうするんですか？」

「手荷物はその辺に置いておけて？ セキュリティは万全なんですか？」

君は確かこんなことを言っていたよ。

鬼ごっこをすると思ひ出す。

「セクハラ！」

君を捕まえた私に、君はこう言い放ったよ。

「なにか好きなもの、の話をしようよ」

ネガティブすぎる君に困った私が提案。

なんとか会話を弾ませたくて。

「あえて言うならビザ、ですけど。」

同じ部屋にはいるけれど、歌わないし踊らない。

でも毎回きちんと来るんだよね。時間通りに。

隅っこで座ってるだけだよ。声をかけても冷めた返事。

でも毎回来るんだよね。面倒くさそうな顔をして。

余程ひまなのか、義務感なのか。

私たちは不思議に思っていたんだよ。

あの大雪の日、バスや電車の運行状況をあらゆるルートで調べたけれど、

どれも動いていなくて

どうしても小金井まで行くことができなかった、と悔しそうに君は言った。

もう会うこともないかもしれないけれど、私はたまたま君を思い出して心配をしているよ。

君がひとつでも多くの嬉しいことを見つかりますように。

へそまがりの君が、ひとりでも多くの理解者と出会えますように。





回転寿司

伊藤安寿華

あそび係のみんなで、回転寿司を作った。なぜ回転寿司だったかというと、前の日に澤さんが食べたから。それだけの理由で、みんなで回転寿司を作った。丸く切った紙に好きなネタをどんどん書いて、ゲームでくっつける、それだけなのに、みんなでゲラゲラ笑いながら作った。紫のイクラとか、青いサーモンとか、ヘンテコなものが色々あった気がする。それだけで、みんなでゲラゲラ笑った。

みんなで夢中になってネタを描いてたら、ポンが、係でやったことを発表しろだって！ 澤さんがワタワタしてる！ エイ、とりあえず回しちゃえ！ だって回転寿司だもん！ カーニバルのイカしたみんなの輪の真ん中で、あそび係のみんなで回転寿司をぐるぐる回した。みんなでゲラゲラ笑いながらぐるぐる回した。そしたら、周りのみんなもゲラゲラ笑いながらぐるぐる回った。みんなみんな回転寿司だ！

日本人は回転寿司が大好きだ。いろんなネタの寿司たちがベルトコンベアにお行儀よく並んで、お客さんの前を通り過ぎながら、ひたすら食べられるのを待っている。お客さんは、席に座っていないながら、好みのネタが流れてくるのを今か今かと待っている。時々待ちきれなくて、気まぐれにお目当てじゃないネタを食べべては好き嫌いと言っている。たまに機械や、ときにはカウンター越しに好みのネタを注文して、ちょっとした優越感を味わったりして。そうか、寿司もお客も、お互いに与えられるのを待っているんだ。受け身×受け身の関係。へえ。

受け身×受け身の関係から、何が生まれるんだろう。与えられるのを待ち、与えられたモノの中から必要なものをチョイスして、受け入れる。そうすれば、波風立たず、混乱も面倒も起きない。あれ、そういう子って、巷では「素直ないい子」って言われてない？ でも、みんなで作った一皿一皿個性にあふれた「回転ずし」は、誰に気をつかうこともなく、ぐるぐる回っていた、いや、自分たちで回したんだ。自分らしさなんて誰に決められるものでもない、自分だけのものなんだ。理由なんかなくて、それがひとりひとりの味なんだから、人と違うことなんて気にすることないんだ。「これが自分なんだ」って、胸張っていこう！

あそび係一タマのカーニバルの本番が近付いていくにつれて、そろそろ「発表」するということを考えなければならなくなってきました。そこで子供たち自身で「発表」やパレードに必要な係を考えてもらいました。衣装係や歌係、ダンス係や司会係と無難な係が決まっていくなかで、ただ遊ぶことを目的としたあそび係なるものも生まれました。あるべき形を取っ払ったことで、まったく音楽やダンスと脈絡のない脱線した発想が、いままでとはちょっと違う対話の空間として生まれました。

係ごとのミーティングには大人のスタッフが必ずひとり以上ついて、子供たちと車座になって「さて、何しよう？」から始まっていきます。キッチリつくっていく係もあれば、まるでまとまらない係もあって、会場のあちからこちらに点在している子供たちの輪が、果たしてパッチワークされるのか、バラバラなままなのか、それは成り行き任せということになります。





身体に残るリズム

猪股桃絵

タマのカーニヴァルの子供たちとのワークショップはいつも散漫としていた印象です。事前に決めてある流れはともにおおまかなもので、本番は収集つくのかと思うことばかり。でも最終的にはいつもなんとかなっていました。いや、ただ自分がなんとかなっていると思っただけかもしれないけれど、無事にタマのカーニヴァルを終えられたということは本当になんとかなっていたんだと思います。このなんとなく決める↓ぐちやぐちや↓なんとなく決まるというような流れの繰り返し、これこそタマのカーニヴァルのリズムであったと思います。

タマのカーニヴァルでは子供たちとの生のやりとりが何より大事でした。音楽やダンス、劇、大道芸など、とにかく自分が楽しんでいないと始まらないし、他者との信頼関係がないと内からの真の表現も出て来ません。むしろそれがあればもう自ずと出て来る。だから、事前の決めごとはざっくりでよくて、目の前の人とのやりとりが何より大事であったと思います。だからその分散らかるし、そのように一旦ぐちやぐちやになった状態をまとめるのは、とても大変でした。このような状態で子供たちが来てくれたのは、何よりもその空間を子供たちが楽しんでいたのであると思います。

個人的に、このタマのカーニヴァルのリズムをぎゅつと体感できたのは、ホールダンスチーム発表の時です。私は市民スタッフの伊藤さんとダンスチームの担当をしていました。発表でやることはいつも通りざっくり決まっていた。二曲編成で二曲目の振りは決まっていたが、一曲目の後半の振りは何も考えていない。しかも、参加メンバーも振り知らない子が当日入るといような具合でした。ホール発表前

の昼休みからダンスチームの練習が始まりました。子供たちも、さすがに人前に立つということもあってか集中力がある子もいれば、中には常に遊んでる子もいました。その子たちにはその子たちにできる役を伊藤さんが与え、振りを知らない子への振りうつしは、子供たちが積極的に教えていました。振りが決まっていなかったところは、伊藤さんが賑やかしに持つて来てくれた風船を使い、その風船を使った身体のやりとりを歌に合わせてやるということになりました。そのきっかけ、タイミングを私もいつもよりびしっと教えて、もう後は本番ぶっつけです。振りを覚えられない子へは、後はみんなのを見ながらやれば絶対大丈夫とだけ伝えました。実際本番では、立ち位置など間違えた子がいれば違う子が教えてくれたり、初めて踊った子も真似しながら一生懸命踊り、踊らなかつた子も、風船を飛ばしてくれたり、伊藤さんはその子たちへキューを出してくれたり、私も私で必死で子供たちに合図したりしていました。この時のみんなの集中力はすごかったと思います。みんなでアイコンタクトをとりまくっていました。そして発表をなんとか終わることができました。いつもの、なんとなく決まってる↓ぐちやぐちや↓なんとなく決まるでした。

この時ほど、みんなでひとつのものをつくり上げようと身体が動いたことはなかったと思います。このようにより一生懸命なんだタマのカーニヴァルのリズムはより身体に残っていたと思います。私自身もとてもスリリングだったけれど、それも含めてとても楽しかった。達成感ありました。私の中でも、濃く身体の中にこのタマのカーニヴァルのリズムが残った日となりました。





帰らない子供たち

加藤日菜子

子供たちの中には、活動が終わってもなかなか帰らない子供たちがいた。スタッフに構ってもらって、時間を過ごす子もいれば、太鼓や工作をずっと続けている子もいた。その子供たちは、楽しい時間をもっと過ごしたい。この時間がずっと続けばいいと思っていたのではないかと私は思う。

子供たちにとって、時間は大人に決められるものであると私は思う。○時から△時までには宿題を解く時間。この後○分からは習い事の時間。など。そして、その時間の制約は、子供たちにいつもつきまとい、大人になっても時間や期限に追われる日々を過ごしている。

なぜ、時間を決める必要があるのだろうか。それは時間を決めれば、その後有意義な時間を送ることが出来るかと大人は思っているからだと思う。実際、親に「宿題が早く終わればその分遊べるでしょ！」と言われたことがあるのだから間違っていないだろう。

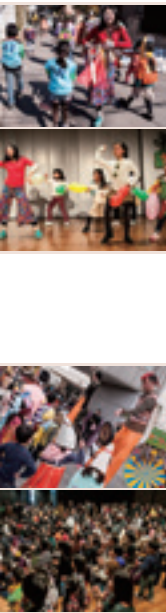
「しだいにしだいに子どもたちは、小さな時間貯蓄家と化した、顔つきになってきました。やれと命じられたことを、いやいやながら、おもしろくもなさそうに、ふくらつらでやります。そしてじぶんたちの好きなように、していいと言われると、こんどはなにをしたらいいか、ぜんぜんわからないのです。」
(ミヒヤエル・エンデ)

そして、エンデの言葉の通り、子供たちは次第に決められなくては動くことが出来なくなってしまう、また、大人は時間が決められていなければ落ち着いていられなくなってしまうのである。

タマカニにいた帰らない子供たち。その子供たちは、自分のしたいことを自分で決められる、時間にとらわれない子供たちだったのではないかと私は感じる。そうやって、自分の好きなことに一生懸命な子供たちに拓かれた未来があるように、私たちが、時間にとらわれることなく、一緒に過ごしていくことが、彼らの成長をより良い方向に促していると思う。

🌂 エンデの言葉―児童文学作家のミヒヤエル・エンデ(一九二九―一九九五)の力作『モモ』は、時間泥棒と少女モモをめぐるファンタジーですが、時間と労働の関係や、時間の搾取が経済的利益となることなどを皮肉った現代社会批判でもあります。子供たちもいづれ時間とお金が等価の社会で労働にいそむようになります。でも、私たちの社会はもう経済的にそんなに大きくする必要はないはずです。世界の中心なんかにならなくてよい道を探る時代に入りました。近い将来、この子供たちが社会に出たときには、生活のための対価を得ながら主体的に自分の時間をコントロールできる未来になっているでしょうか。





そのまにはかなしいことだったってあるよね。
 そうそう、みつけたことやあたらしい「あいであ」、
 うれしかったこと、つたえたいこと、なんでもかいてね。
 このノートには、おもったこと、はっけんしたこと、
 そらのトリにだっておしえてあげてね。
 おともだちやおかあさん、ネコだって、イヌだって、
 おともだちや、おとなりのおばさんや
 おとうとやいもうと、
 あたらしいおともだちとであつたよ、
 きょうは、タマのカーニヴァルで、
 こんなことがあつたよ、
 あのね、

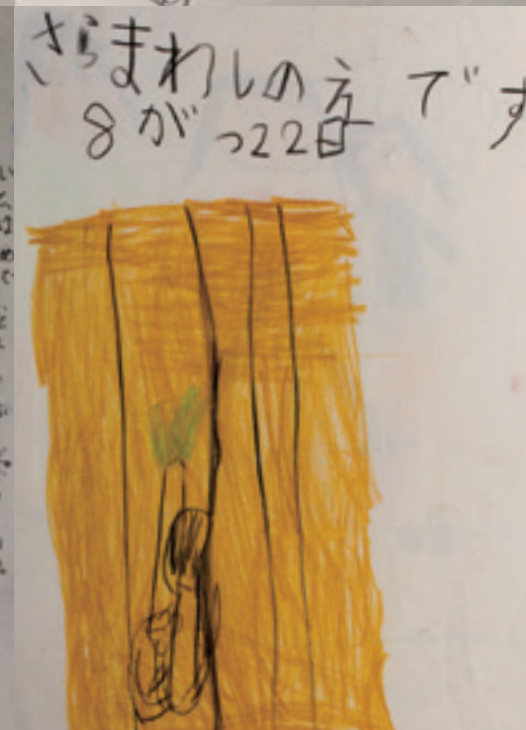
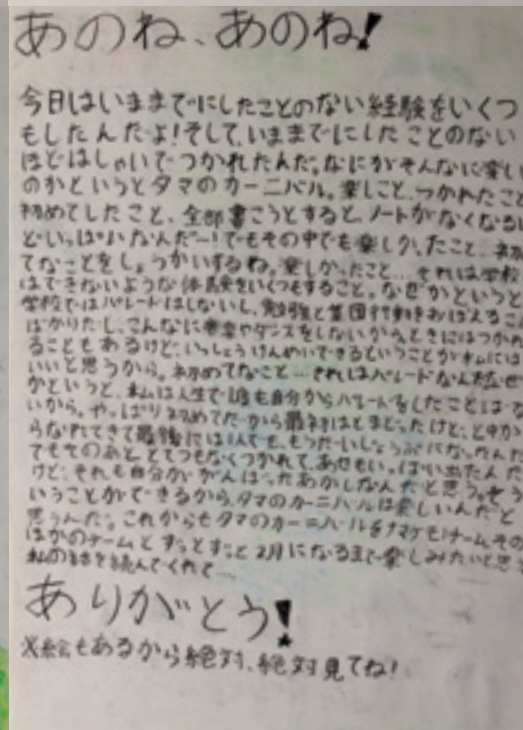
子供たちの歓声をききながら、ふと空を見上げるといつもと変わらない空があるのだけれど、少し、その空がいつもと違って見える。そんな日々の積み重ね。いま、ここで出会う子供たちがこの出会いの一瞬一瞬をどうつかまえていて、そして、その一瞬は子供たちにとってどのような経験となっていくのだろうか？二週間に一度、七ヶ月に渡る日々のなかで、大人が大人の都合で子供をわかろうとする試み。あるいは出会いの意味を考へること――。

ひとりひとり、背景も思いも、好きなものも嫌いなものも違うたくさんの子供たち。一体彼らはここで何を、聴き、何を感じていたのだろうか。記述することにも、その思いをつかまえることも、本人にすらできないに違いない。ただ、この時が過ぎていくだけだ。けれど、歌う時、ふと隣の友達と顔を見合わせて微笑みあう時、思いもかけない跳躍を目にする時、それは空をよぎる光のように一瞬だからこそ、虚飾のない宝物のような瞬間であつたかもしれない。あるいは何かを描き出そうとする試みのなかで、描かれたことの、そして描かれなかつたことの両方に複雑な今を生きる子供たちの「いま、ここ」の断片がちりばめられているかもしれない。

結局のところ、私たちは子供を完全に理解することなど出来ないのだけれど、それでもなおその出会いの意味を、彼らがここで何を思い、何を感じたのかを私なりにつかみたい。そして、願わくばそれに寄り添うことができれば。そこで思いついたのが、この、タマのカーニヴァルのノート。

タマのカーニヴァルのノート

宮下美穂



だいきなタイコとか、おどりのこと、ふるーとのこと、
 たくさんの「え」もかいてね。
 おうちのかたへ
 ① 思ったことは遠慮しないで書いてください。
 ② お友だちが書いたページを大切にしておいてください。
 ③ 次にタマのカーニヴァルに来る時に忘れずに持ってきてください。

これが、ノートの最初に書いたお願い。四つに分けられたナマケモノ、バク、カワウソ、ムジナの各チームに二冊ずつ用意されたノートは、一日の活動が終わった後、ポンちゃんの声かけで手をあげた子供に託され、翌週、絵や文字が書かれて戻って来た。一輪車のこと、タイコのこと、歌のこと、友達のこと、子供らしい、飾り気はないけれど楽しい絵と言葉。手で擦った鉛筆の汚れや小さな間違いや消し忘れとともに。

さて、私たちは彼らの経験や思いに寄り添うことはできたのだろうか。残念ながら、それはわからないし分析もできないだろう。そして、そしてそれを問うことを自体大抵無意味だ。

活動が終わった今、私たちは彼らにマイクをむけて、この体験の意味を聞きたですことはできない。手元に残ったこのノートを眺め、ひとりひとりの子供が、食卓で、勉強机で、テレビの前で、あるいは床に寝転がって、タマのカーニヴァルを思いながら、このノートを書いた姿を思う。私は彼らがタマのカーニヴァルの時間を思いながらノートを書いたのと同じように、彼らのノートを書く様子を想像する。その時間が幸福な時間であつたことを願いつつ。

所詮、出来事の全容をつかむことはできず、誰かが誰かを理解することは到底、そしてほとんど困難である、けれども、それはあながち諦めでもない。逆に、このノートは、等しく、等価に、大人や子供、という区別を超えてその時間、その出来事、理解できない他者を想うことにある望み、そして描かれた絵や言葉が響きあい、その響き合う声の記憶はなかなか消えないということを遠く響く声のように教える。





休み時間

井上麻衣子

—— タマのカーニヴァルの休み時間の子供たちの様子、
—— くじら山（武蔵野公園）へ行きパントマイムをした。想像力を膨らませてみんなでひとつの大きな球体を持ち上げ空に投げるといイメージの共有だった。その後、なんとなくそのまま草原にゴロリと寝転んで宙を仰いだ。ひとりまたひとり、子供も大人も寝転んだ。（大地とひとつになる？ 雲の向こうには何がある？ さっき投げた大きな球体はどこへ？ つないだ手と手の温かさ感じる？）そして、唐突に鬼ごっこみたいな遊びが始まり走り回る。

—— ピアノを弾く子の音に合わせて静かに体を動かす子。

—— 大きな模造紙にみんなで絵を描いた時、隣の子の絵に影響を受け自分の絵が変化しつなっていくのを楽しむ子。

—— 只々ボーっとして何かを内省する時間を過ごす子もいた。

—— 回を重ねるごとに表現のヒントをもつ大人たちに絡みついてスキンシップをとる子も多くなっていた。

—— こう見ていくと、大きく緩やかな流れがある中で、

タマのカーニヴァルの活動とその休み時間の境界線は曖昧で、むしろ休み時間中の子供たちこそがこのワークショップの本質的なところを見出していたのではないか。

タマのカーニヴァルでは「個」が許される範囲が広がった。普段はダメなことがOKになったりする場だった。みんなで何かをする時、「個」の世界から「共感できる世界」へ押し出す装置として他の人にも伝わる言葉（音楽、ダンス、身体表現、デザイン、司会、絵を描く、取材する）は大きな役割を果たしていた。

休み時間は、素でいられる個と集団（社会）の中間にあった。

バランスをとる時間。緩やかに融け合っしみ込む時間。

心地好い所にとどまり、より深く興味を追求したり、多様の中に自分を置くことで生まれる気づきがあったり、何を選んでどんなバランスで過ごすかは自分次第。

好奇心やリラククスを自由に開放し、自然とそれぞれの持ち味をもって生きてゆくことができたなら、そもそも休み時間なんてない動物たちと同じように、ものごとの根源的なところを本能で感じとっていくことができるのではないかと思う。





タマのカーニヴァルのコード

伊藤安寿華

このお題で、まず「コードって何？」ということが分からず、調べてみた。「基準、規則、法典、暗号の一種」ということらしい。つまり、「タマのカーニヴァル」とは何だったのかということを読み解くカギを見つける、ということが良いのだろうか。

タマのカーニヴァル（以下タマカ）の目指していたことは、「成果を求めない」という挑戦であった。しかし、このプロジェクトの最後には「大行列」という成果発表の場がある、という矛盾が最初からあり、特に後半のワークショップはこの矛盾にいかに対峙するかという課題をつきつけられていたように思う。

この目標には、「今を生きる子供たちは生活のあらゆる場面で成果を求められている、しかし本来成果を出すことだけが意味のあることではないし、成果だけで評価されるべきものではない」という思いが込められていたそうである。しかし、日常の場面で、昼休みにひたすら鬼ごっこをしたり、放課後に友達と自転車やプレイボードで走り回ったりしている子供たちの姿からは、大人さえ介入しなければ、子供たちは成果なんて気にして生きてはいないのだろうと思わずにはいられない。子供たちの毎日は真剣で、その時その時のプロセスに全エネルギーを注いで生きている。そこに成果という概念を与え、枠にはめ込んでるのは大人なのではないだろうか。

成果を求めない、ということは、プロセスを経て出てきた結果を認めない、ということとはまったく別物なことは言うまでもない。例えば積み木遊びの中で高く積めたら大人に見てほしいのと同じように、一生懸命

命練習してピアノがうまく弾けるようになったとき、

大人に見てほしいと思うのは自然なことだろう。しかし、そこで見てほしいのは、上手に弾けるようになったこと（Ⅱ成果）ではなく、一生懸命練習するというプロセスを経て本人が満足するに至った、その結果なのである。それを勘違いしている大人が多いから、「上手ねえ」などと安易に声かけをしてしまい、子供をがっかりさせてしまう。その繰り返しで子供を萎えさせ、大人の満足する「成果」に向かわせてしまうのではないだろうか。タマカのワークショップでも、たくさんの歌を練習したし、踊りも覚えた。覚えてスムーズに歌えたり踊ったりできるようになったら嬉しいし、それがみんなと合うようになったら楽しい。一生懸命練習することを「成果を求めていることになるのではないか」と大人が中途半端に扱ってしまうと、せっかくの子供たちのエネルギーはどこで受け止めてもらえるのか。子供たちが大人の迷いを敏感に察知し、ワークショップの雰囲気の中に如実に反映されていたように感じていたのは私だけだろうか。

ゴール（Ⅱ成果）を決めてそこに子供たちを向かわせるのは、ある意味楽である。ゴールを決めないのであれば、子供たちがそのプロセスの中で出すたくさんのエネルギーを、何があっても受け止めるという意気込みで徹底的に向き合うべきだろう。そうやって子供と大人が対峙してこそ、子供は豊かに育っていくのだと思う。

そう考えていくと、「成果を求めない」という目標は、子供たちではなく、われわれ大人が「逃げず隠れず、いかに真正面から子供たちと対峙するか」、ということだったのかもしれない。

🍃 成果を求めないとは？「成果」や「達成感」については実はずいぶん議論がありました。学校では学習の達成度が求められ成果が子供たちの評価へとつながります。だからタマのカーニヴァルは学校とは一線を画して子供と向き合おうというのには言うは易しだけれど、話はそんなに単純ではありませんでした。関わっている大人のスタッフたちの心持としては、最終的にパレードをすることが大前提となっていて、毎回のグチャグチャと方

向が示されない感じというのは不安であったし、自分たちの立ち位置を確認できないといった側面があったと思います。伊藤さんは元気な男の子二人と一緒に参加し、スタッフとして中心的な役割を担ったお母さんで、この問題に対して最も真剣に向き合ったひとりです。

子供たちが何かに取り組んでいるプロセスを大事にするときに、そこで何かを達成したことは子供にとってかけがえのない経験であ

ることは言うまでもありません。でも、きれいな形で達成できていないとしても、つまり大人の価値判断として達成に至っていないと見えても、子供たちはそのプロセスにおいて、前進したり後退したりしながら、瞬間的な達成を断続させているのかもしれない。伊藤さんは子供たちのそういう小さくても見えにくい営みと一生懸命向き合おうとし、同時に私たち大人のエゴイズムとも自覚的に向き合っていたのだと思います。





親が見に来る、声が響く

田中みさよ

想像ですが、多分、子供たちにとっては、普段親が自分とどこか常につながっているということは当たり前で、なんでだか、ワークショップの場と比べると、例えば学校もやっぱり、親とのつながりがあったままの場かもしれないと思いました。授業参観とかありましたが。

自分が自分として立って、そこには、自分の保護者の意思が介在したりすることは無いということ。自分の表現をつたって表れる心は、存在として、魂が根っこに来るんじゃないかと思えます。

親から一旦離れて、そしてまた違う形で、出逢うことによって、新鮮に意識される何か。自分と親の間には空気があって、そこを風が通り抜けることは当然であること。

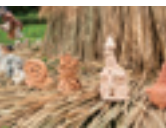
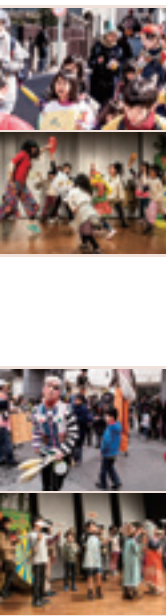
自分が動いてみて、それによって風が起きたり、周りで動いているみんなと、自分の動きが絡まったり同時に来たり。

新しい、ダイレクトなやり取りの試みがあるのと同じ時に、それがあらためて、あの『自分の親』からはどういう風に見えるのか、ということとは、子供たちにとって特別な刺激として、機会としてあったんじゃないかと思えます。

何だかぐらぐらとした不安や戸惑いが、自分の中で際立ったりもしたり。親に、どう見えるかな、普通に、観客のひとりとして楽しんでほしいな、という感情。それは、それまでの親と子、という関係の外で形成された新しい関係性の中の感情じゃないかなと思います。

動いてみて、歌ってみて。そして響くもの、身振りが震わしているもの。そこに空気があったということ。その発見は世界の厚みがくると、変わる瞬間かなと思います。

🌂 中間発表会—ちょうどタマのカーニヴァルが半分を過ぎたころ、東京学芸大学のホールとキャンパスを借りて中間発表会をしました。「最後にはパレードをするんだよ」と子供たちには伝えていましたが、毎回パレードへ向けて練習したりすることがないので、そろそろみんなにイメージしてもらうためにも、そして親御さんたちへの「わたしたちちゃんとやっています」を伝えるためにも、ちょうどよい頃合いでの発表となりました。またパレードのシミュレーションをしておきたいという大人の都合もあったわけですが、保護者を前にした子供たちは異様なテンションの高さで、普段は「タイコ」の歌で踊らない子供まで踊る始末。警備員さんに怒られながらキャンパス内をパレードし、ホールに戻ってからは保護者の方も招き入れて「タイコ」の歌のアンコールパフォーマンスをしました。





飽きる 飽きたその先

中根久寧

タマのカーニヴァルのワークショップでは、カリキュラムをこなすような定型の活動ではなく、子供たちの興味やノリを取り入れて臨機応変な展開がおこなわれていた。学校とは違いアウトで自由な展開ができるので、造形、演奏、ダンス、パフォーマンスなど、エネルギーを向ける方向が見つかった子供たちは集中し、没頭していった。

それぞれの向いた方向には、技術を持ったいろいろな大人がつきあって、造形や技術のサポートをおこなった。想定を超える子供たちの振る舞いに刺激され、さらなるサポートで、素敵なのが創り上げられていった。その経験は積極的に取り組んだ子供たちにとって、とても貴重で重要な体験だったと思われる。もちろん大人たちも新鮮で刺激的なワークショップであった。

しかし、活動に興味を持ってない。ふらふらとたち歩く。関係ないことを勝手にやっている。大人にちょっかいを出し絡んでくる……。どんなワークショップにしても何人かはそんな子供たちが現れる。その場合はうまくリードして目的に沿った形で進めることが多い。だが、このワークショップには積極的に参加しない自由も受け入れる余裕があった。

小学生全般を対象にした活動において、高学年では、「目標が簡単すぎですぐに終わってしまう」「子供っぽくてやってられない」などと思う子がいる。また、自分の興味をひかれるものに集中してしまっただけの活動目的とは全く違う方向にのめり込んでいく子もいる。そして時間をもてあまし、退屈する。あるいは自分だけの楽しみに没頭するかたちで、関係ないことを始

める。そんな「活動に飽きてしまった」子供たちもそこで勝手に過ごすことを許される空間であった。だから、積極的に参加はしないのになぜか毎回やってくる子供たちが何人もいた。彼らを感じる楽しさや自由さがそこにはあったのだと思う。

もちろんそういった子供たちにも、とことん大人がつきあっていった。子供たちのやり場のないエネルギーに、新しい方向性を与えようとした。それはすぐに結果の出るものではなかったが、お互いの試行錯誤の中で、その子供たちの新しい興味が徐々に形成されていった。

最終的な活動の枠組みも細部まで最初から決まっていたわけではない。子供たちの様子やつくり上げたものを最大限に生かすようにまとめていく過程で、即興劇に伴奏をつける楽器チームや、進行係担当などが直前にかたちを成していった

最初は想定していなかった役割を、活動に飽きてしまった子供たちが考え、創りだした自らの居場所。短期の活動では出せない成果で、また懐の広いワークショップでなければ現れることのなかった成果だと思ふ。

本来の活動目的を尊重しつつ、目的に沿わない行動を許容し、方向の定まらない子供たちも包括して活動を進めることによって、最終的により広がりのある展開になっていった長期にわたるワークショップの経験は、私にとって興味深いものであった。しかしそれ以上「自分の発揮させ方」を学んだ子供たちにとって忘れ難い経験になったのではと思っている。





全然ちがう子供の話

澤和幸

集団行動からはぐれる子供も、もちろんいます。性格、嗜好、体調、微妙な人間関係、小さなプライド、そんな時の気分。そこにはいろんな理由があるのでしようが、自分にも身に覚えがあるし、今の自分の半分以上はその結果のカタチだと思っているので、それは決して悪いことではなく、むしろ新たな発見のチャンスみたいに僕は思っています。

タマのカーニバルで「天気がいいので公園に行こう！」となったある日、公園で一丸となって豪遊し始める小学生たちを横目でクルに眺めながら川に石を投げる二人の中学生男子を発見しました。このワークシヨップでは見たことない子だし、みんなと年齢差もあるし、途中参加で場違いを感じているのか彼らは完全に蚊帳の外。僕はまず二人の投石に参加しました。自分もやりたかったし、野球好きなので個人的にも加齢によるコントロールの狂いをチェックしたかったのもありますが、ここは「なんとかコイツらの居場所をつくらなければ」と。

僕が参加するとすぐに二人は投石に飽き、次に川の危険地帯に入り込み始めました。危険とはいえ遊びの冒険レベルですが、僕は大人のアイデアを発揮させ、「こっち来いよ、こんなこともできるぜ」的なことを披露してみました。「このオッサン、使える」ぐらいに思ってもらえたらしめたものです。ですが相手は中学男子、よほどのことじゃないとノッてきません。おせっかいからの提示は無駄で、あの年齢だと引いちゃうだけです。後から思ったのですが、そうやってダラダラしている時間に二人が何気に話す会話の中にヒントがあったんですね。カード・ゲームやアニメ、それ関係のイベントの話。彼らの脳内はすでに「歌って踊って作って遊んで」ということなど興味ないし、音楽といえは好きなJポップやアニソンに夢中ですよ。それでいいんですよ。僕は仕事でフィギュアなどの原形も作っているので、最近のアニメなど一部知っています。アレはアレでおもしろい。それもあって彼らの心は一瞬開き、ダラダラと川を散策しながらほんの少し共通する話題を突き合いました。

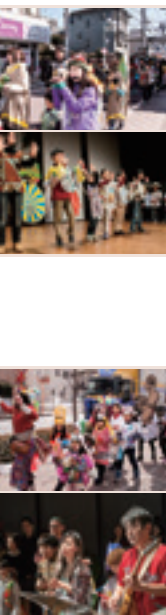
草むらに戻って再び三人で投石。今度は彼らとの密着感有り。本気でコントロールを競い、続いてなぜか肩車。「肩車できる？」と言いつ出したのは彼らの方で、

スゲえスゲえ言いながら喜んでましたが、最後に最も幼稚な遊びで盛り上がり過ぎて帰って行った彼らが、実はワークシヨップ参加者ではなく、全然ちがう子だったというのは後から知りましたね。



万人のための大人「澤さんはギタリストでありますが、美大を出たスキルを活かした仕事もしています。徹夜明けでタマのカーニバルに参加することもたびたびあったりして、会場に到着するや否や床でゴロンと居眠りなんてこともしょっちゅうです。当然ながらやってきた子供たちのイタスラの餌食になり追いかけてこがまります。澤さんはおじさんですが全力で子供たちを追いかけまわします。マジで子供たちと戯れることに、疲れを知らない子供たちが疲れを知ることになります。

こうした大人と子供が一緒にいる現場では、大人は分け隔てなく子供と接しようなんてことを目論見ますが、どうしても、お得意ささまのような距離の近い子供たちの相手に終始してしまいます。澤さんは会場で居眠りをするくらいですから、いつもスキをついて、万人のための大人、といった趣で、すべての子供たちが澤さんに寄り添ったか光景は壮観なものがありません。そんな澤さんがタマのカーニバルの参加者ではない子供と遊んでしまうというのは、まさに、万人のための大人、を全うする澤さんの真骨頂ではあるのですが、そういう愛おしいオトナである精神は横に置いておいて、きつと石投げをやりたくてしかなかったという子供のよいうなシンプルな動機が澤さんにあっただけなのかもしれません。





多中心性

村田 亘

初めてタマのカーニヴァルのワークショップを訪れたときに、これはなんの為の活動なんだろうと疑問に思ったことを覚えている。会場の小学校の体育館では、一輪車で遊んだり、皿回しにチャレンジする子がいる一方で、ピアノの伴奏に合わせて金物を叩いている子もいれば、ステージに上がって好き勝手に遊んでいる子もいる。一見ただ無秩序に遊んでいるだけのように見えなくもない。

タマのカーニヴァルには街を巻き込んで大行進を敢行するという大きな目標があるということは聞いていた。しかしそこには「みんなで一丸となってひとつのことを成し遂げよう」といった雰囲気はない。また、参加者個人にしてみても、例えば一般的な習い事のように明確な目標が必ずしもあるようには見えない。

ある回のワークショップで、レポーター役の男の子と組んで会場の様子をレポートすることになった。話を聞いてみると、彼は「子どもスタッフ」としてタマのカーニヴァルの様子を記録する役回りらしい。いつの間にかそんな役割(?)ができたのかは分からないが、なんでも今回は「子どもニュース」として映像を作ることが目標らしい。そこでカメラマンが必要になり私がかかることとなった。とりあえず、他の子供たちやスタッフにインタビューをしてみようということになり、二人で内容や時間配分を考え会場に繰り出した。

五分程に編集されたその映像を今見返してみると、レポーターの彼は、ディレクターの港さんやサーカスアーティストの金井さんに対して、「タマのカーニヴァルの目的ってなんですか」とか「目標ってなんですか」といったことをしきりに聞いている。やはりみんな同じ疑問を抱きながら参加していたのだ。

タマのカーニヴァルの一通りのイベントが終わって半年以上経つが、その答えはまだ分からないし、これからは分からないかもしれない。今でも、あの時の彼はまだタマカ目的について考えてくれているかな? などと思いつつ、ワークショップ情景を思い出すことがある。そういう意味では各々のカーニヴァルは未だ緩やかに続いているのかもしれない。



多中心性一歌ったり踊ったりしたくない子供たちにはスタッフのための取材や写真撮影をやっても新聞のための取材や写真撮影にあたってレポーターをしても良かったり、みんなとっても張り切ります。そもそも、歌ったり踊ったりすることを謳ったタマのカーニヴァルにそういう子供たちがいるのも不思議ですが、集団で何かをやらざるを得ない状況と距離を置きたい子供がいるのは当然です。手持無沙汰だったり、なんだかノってないような子供がいた場合は「いま手が離せないから、あそこの写真撮ってきて!」なんてお願いしたりもしました。参加人数が多いので毎回グループワークで進めていったので、そこかしこでいろいろなことが繰り広げられているなを縫うように、カメラを携えたりメモを走り書きしたりしている子供たちがいるのは、タマのカーニヴァルの日常的な光景のひとつでした。





休み時間

加藤日菜子

タマのカーニヴァルの最中の休み時間のことで書くことを書いてくださいと言われ、正直困っている。休み時間ってあったっけ？ 活動がぶつ切りになってしまわないようにひと段落ついでから休み時間を取っていたことで子供たちの気持ちが削がれてしまうことがなかったように思う。

学校では休み時間は極めて厳守される傾向にある。教育実習に先日まで行ってきた中で感じることもなかもしれないが、授業時間は四五分。それ以上ながくても短すぎてもダメというのが鉄則であった。しかし、子供たちが興味があることに没頭して時間を忘れるくらい楽しんでいられるならそれを尊重するべきであると思ふ。

おそらく学校では時間を守るということを覚えるために時間に対して規律正しくしているであろう。しかしタマのカーニヴァルでは、なんとなくみんなが集まってきたら活動がスタートして、そろそろ時間だねという感じで切り上げていた。じゃあ、切り替えて今からやりましょうというよりも、自分たちから、そろそろ始めたいなという気持ちになっているのだとしたら、内発的動機付けに成功しているということであり、とてもよい結果を導いていたのではないかと思う。

🌂 休み時間一休み時間とそうでない時間の区別が判然としないのは加藤さんも亀田さんも述べている通りです。加藤さんは教育学部の学生だから学校の規律的な時間と相対化して考えるし、亀田さんはフルト奏者で、教室ではたくさん先生の生徒を持っているので、教える人と習う人の関係性が壊されているタマのカーニヴァルの時間に眼差しを向けています。

タマのカーニヴァルでの休み時間は、結局のところ大人のためだったのかもしれない。とはいっても、澤さんをはじめ大人たちは子供たちの餌食となるのですけれど。子供たちにとっても、休み時間は楽しい時間であって、いつもにましてハイテンションだったりするわけですが、それはやっぱり子供たちにとっては大人の仕切るオンの時間が確かにあったということでもあります。そのあたりの加減は難しいですけど、お風呂に入っているうちに気持ちよく眠ってしまうかのような、そういうオンゴーイングに移行するような休み時間ができたら素敵です。





少年たちへ

宮下美穂

いつかあの空を、あの響きを思い出して欲しい。君たちが戸惑いながら違和感を感じながら、全身の神経を尖らせて張り巡らせて足を踏ん張って立っていたあの時のこと。

当たり前のように、大人の言うことは聞くものだ、こちらを向け、あちらを向け、みんな一緒に、先生のタクトに合わせて歌え、踊れ、しかも幸せそうに、誰かが期待した通りに、予想された通りに、譜面通りに、子供らしく楽しそうに、大人が満足するようにって暗黙に求められている、君たち。これができると「上手だね」って言われる。そんなのまっぴらだよ。

人生に音楽があることは素晴らしい。一緒に声を合わせて歌うことも、夜空の下でガールフレンドと微笑みあって小さな声を合わせて歌うことがあったっていい。夜中に車の中で囁く音楽は強烈に素敵だ。語ることと囁くことと音楽の境界は曖昧。音楽は自由だ。でも、学校の音楽はそうはいかない。確かに一二音階を知っていても損はしない。大切なことだ。人の指示を聞きながら皆と同じことができることも大切なこと。そんなことはよくわかっている。でも、それが大人の一方通行の価値観の押しつけや発表やらの都合だったり、子供の自由を押しつぶす可能性があるとしたら、やめた方がいい。何よりも、音楽はひとつだ、そして教わるものだと子供たちが思ってしまったらとても残念。

もうひとつ、とても大切なこと。音楽は危険だ。音楽は陶酔する。音楽は陶酔させる。熱狂させる。合唱の声がピタッと合う時は爽快だ。そこにはこの場合二つの側面がある（本当は音楽は商品か？ などなど、いろんな問題もあるけれど）。ひとつは歌えない子、歌いたくない子が排斥されること。もうひとつ、もっと深刻なこと。それは音楽は人の心をコントロールすることができるとだ。これが良い、と快楽であると思わせ、疑わせないこと、ひとつの方向に進進するように、あたかもハーメルンの笛吹き男のように、人々をひとつの方向に誘う力も持っている。その力は強大。

君たちの振る舞いに対して、取り巻く大人たちの中

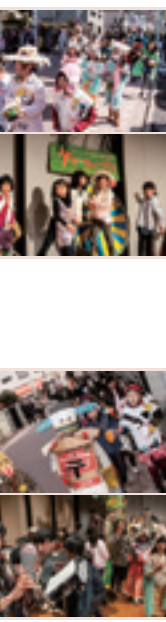
では、放置しておくのは大人の怠慢、無責任だ、彼らと向き合うべきだ、彼らを迎え入れるべく大人は努力するべきだ、という意見と、見極めながら放っておくことの方が余程忍耐力が必要で、彼らにとっては必要なことなのだ、という二つの意見がいつも交錯した。

よくよく考えると別段矛盾したことではない、「迎え入れる先」が大人の都合でなければいいだけだ。この対話を通じていつも考えさせられたのが、結局試されているのは大人ってことだ。タマのカーニヴァルは学校と同じことはしないって言っていた。それは本当？どこまで本気なの？ どこまで俺たちを受け止める本気と勇気があるの？ って。つまりね、皆と同じことを強要する、それは大人が管理しやすいからなんだ、ってこと。君たちは体で知っている。

君たちが端的にあぶり出したのはそんな矛盾だったのだろう。皆が歌っていても、行列の役割を相談していてもお友達の前には入ってこない。遠巻きに見ている。他のお友達と同じことはしない、むしろやめてってことばかりやらかしてくれる。外に出ないで、美術館の階段では遊ばないで、楽器に触らないで、なんて、ヒヤヒヤしてばかり。

大人の矛盾、大人が嫌だなーって思うところにきちんとかわい歯をむく愛すべき少年たち。君たちが投げ込んだ石は、自分と違う人がいたら排斥せずに、せめて違いを認めよう、矛盾を矛盾としてちゃんと受け止める強さを持つよう、変なことはヘンだって体がムズムズするくらい反応できるように、開かれた心でいようってことを伝えていた。

行列の日、ドラムの清水さんの横に陣取って、ドラムを叩く君。清水さんは君の動きに助けられたって言っていたよ。清水さんの動きと共鳴するように、リズムを刻んでいたね。呼応し合うパーカッションの音とリズムは、君と清水さんの言葉にならない解放された対話だったのかも知れないね。そう、対話の方法もわかりあう方法もたくさんある。言葉にならなかったら、一緒にリズムを刻んでもいい、本当はそんな時に心から歌えたら素敵だね。それは誰かを操る音楽ではない。心と体を開く豊かな宇宙。君たちが君たちなりの方法で獲得した、豊かな、ね。





音とダンスが近づいて来る

猪股桃絵

大行列の日、小学校の休憩地点での演奏とダンスが、私はとても楽しく活き活きしたものに感じました。ダンス隊がトイレをすませ出発を待っていると、音楽隊が演奏を始めました。私は自然と音の鳴る方へ誘われ、ダンス隊で作った大行列の時の踊りを始めると、いつもよりも堂々と楽しそうに子供たちも踊りだしました。人前で急に踊ることは子供たちはいつも躊躇するのに、その時は自然に踊りだしたので驚きました。その日、ダンス隊はいつもより衣装もきめて、ピエロもいたりなんだかお祭りのような雰囲気にも気分が高まっていたのだと思います。

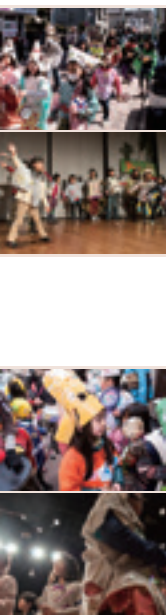
音楽はごちゃごちゃにまとまりきっていない感じでしたが、だからこそなのか、とても奔放で楽しげで、思わず身体を動かしてしまう感じがありました。そのような状態になったのは、その休憩ポイントが、特に何かをするというような決められた空間でなかったことがとても大きいのだと思います。特に誰も見ている訳ではないという圧力のなさや、学校の休み時間のような気の抜け具合が子供たちにリラックス感を与え、皆自分のペースで好き勝手に楽しむことができたのだと思います。音楽が楽しそうに気軽に弾んでいると踊りも気軽に楽しく踊れます。

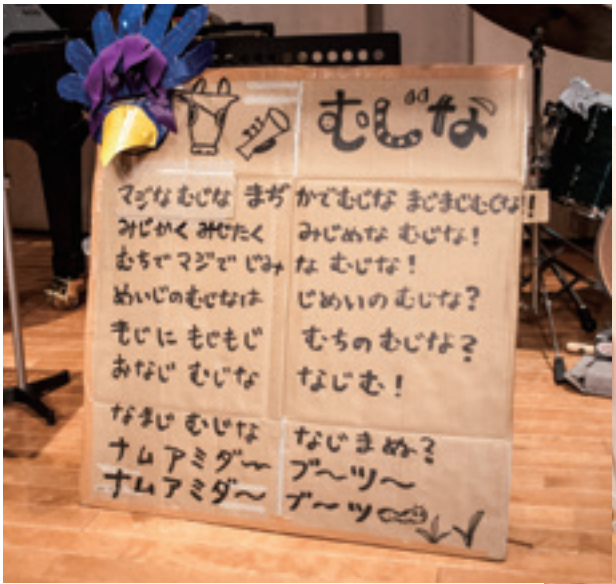
また、私が印象に残っているのは、その日の終了後に、二日目に出演するゲストのダンスチームとバンドのリハーサルをしている時です。この曲目は、爽やかだけれど、どこかゆったりとした穏やかな女性らしさがありました。ゲストのダンスチームも女性です。音を通して軽く大人たちが踊っていると、親の迎えを待って遊んでいた二人の高学年女子がゆらゆらとごく自然に一緒に踊り出しました。私は驚きました。振りも決まっていない踊りを即興で、しかも高学年の年頃の女の子が、踊りだすなんて！ 普通ならとても恥ずかしいが、私は本当にびっくりしました。目もきらきらしてとても伸びやかでした。私は、すごい素敵ー！ いいよ！ 本番も一緒に加わってきていいからね！ と、声をかけましたが、本番はいやだ！ と言い張りました。きつとその時だからできたことだったんでしよう。もしかしたら、本番踊ってくれるようにもつといいアシストがあったかもしれない。それにしても、本当にその時にしか出ない自然に出た素敵

な踊りがそこにはありません。その空間も子供たちからしたら、特に何も決まっていない、ただ親の迎えを待つ遊びの時間に過ぎませんでした。リラックスした状態で、その時の空間への素直な反応をしただけなのでしょう。

いずれも、何の時間でもない自由な時間に伸び伸びした音とダンスのコラボが生まれていました。身体も頭もリラックスした状態が、奏でる音も身体も伸び伸びとし、音と身体が近くなる大事な要素なんだと感じました。

本番二〇一四年二月二日と二日のタマのカーニバル「本番」は二部構成となっていました。まず最初に小金井の街を練り歩くパレード、そして小金井市民交流センターでのチームごとの「発表」です。とにかくいろんなことが詰め込まれているので、子供たちはそれはそれは楽しそうです。大人たちはといえば、公道をパレードするので安全確保に気がでないし、ちゃんと発表できるか心配だし、わりと心ここにあらずなんです。子供が楽しければそつなく進むものです。猪股さんが書いてくれているように、本番では思いもよらないミラクルがたくさんおきました。これは大人から見たらミラクルなだけで、実は当事者たる子供にとっては温存していただけなのかもしれません。でも、やっぱり「本番であること」も意識している子供もいて、やっぱりそれは「失敗したくないな」とか「いつもと何か違うな」とか感じてしまったからなのかもしれません。これだけの大所帯を「発表」に持ち込むにあたっての力技による歪みが、目立たなかったけどちょっとだけありました。





こどもしんぶん

鈴木佳子

「眠ることは 死ぬことだ」

港さんが作ってみんなで歌った。ケイスケさんはパントマイムでそれをやってみせ、ももちゃんは振りをつけて、みんな体で表現した。

はけの森美術館のなかや、くじら山とみんなが呼ぶるはらっぱで。

こどもしんぶんは、子供記者がスタッフにインタビューしたり、スタッフの子供たちが写真を撮ったりした素材で構成した。文章はさすがにコーディネーターのポンちゃん作り、わたしが写真を切り抜いたり、吹き出しをつけたり、イラストやみんなの絵日記を配置したりして制作し、A4表裏で計四号発行した。これがタマのカーニヴァルで何が行われているかを保護者が知る唯一の手がかりだったように思う。

三号目は一月三〇日にはけの森美術館から飛び出して、みんなで武蔵野公園のはらっぱまで行き、そこでパントマイムやダンスをしながら体を動かした様子を報告した。この時の写真ははらっぱにみんながゴロゴロ寝転がっている写真。こどもが撮影したので、少しボケているのだが、実はただ寝転がっているのではなく、死体のフリをしているのだ。よく見るとなかには人と折り重なって目を半開きにして、リアルに死体を表現している子もいる。

お葬式ごっこや死んだふりは子供にとってポピュラーな遊びだ。ダメだと言うほどやりたくなる。だからこの時も、みんなとってもノリノリ。

だけど子供が「死」について考えることに、大人はついナーバスになってしまふ。それは、「死」という恐怖からなるべく遠ざけていたいという気持ちと、いじめや自殺を連想してしまうから。

でも、港さんの曲「いつもふたたび」は、この一瞬は、次の一瞬には死んで、また新しい一瞬が生まれているといった歌詞だ。そんな歌を清らかな水が少しずつこぼれていくようなメロディーにのせて、みんなが歌いながら、体を動かす。それはなにか原始から人が繰り返してきたであろう儀式のような、とても納得の

いく光景だった。

ある時、死体のパントマイムで、ももちゃんを埋めるといふことになり、みんなが一斉にももちゃんに乗っかったり、服を載せたりしはじめた。やっぱリノリで、ちょっとエスカレートしすぎて危険な感じがし始めると、その中で冷静になって止めに入る子もいたりする。こういう経験が子供たちにとってどんな影響があるのかなのか、いいのか悪いのかはわからない。

ただ、そこにいた大人たちはずっと暖かく見守っていた。危ういこと知りつつ、大人がひたすら見守っていること自体に意味があると信じて。

そんな危険を孕んだことをやっていたということも、こっそりちゃんと「こどもしんぶん」には掲載していたのだが、保護者からのクレームはどうやらなかったようだ。



こどもしんぶん「タマのカーニヴァルのプロセスの周知を図る目的もあつたのですが、当初のプランとしては歌うことやダンスをすることよりもスタッフワークのようなことに興味のある子供たちと一緒に編集部をつくって、本体とは独立した動きを持ったならばおもしろいことになるのではないかとという目論見がありました。残念ながら独立して子供たちが主体的に動くようなことにはなりませんでしたが、こどもスタッフたちのモチベーションがある格好のメディアとしてこどもしんぶんは機能していたようです。目の前で起きていることを記事にするという子供たちが担うとき、単なる好奇心で対象を決めていくと思いがちですが「あれは写真を撮ったほうがいいよ」とか「あの子に話をきいたらいいかな」などと、客観的な報道姿勢と子供なりの主観性が絶妙なバランスで発揮されていて、タマのカーニヴァルではジャーナリズムはどっこい健在であったというところでしょうか。



パレードとの連続性は？

亀田奈美子

蒸し暑いある日、ボンちゃんにこれから始まる活動について説明を受けたときに、唯一イメージが沸いたのはパレードの話。多くの人が連なって、音を出しながら歩く、あれでしょう？ その後その活動には「タマのカーニヴァル」という名前が付き、さらに暑くなった頃、参加してくれるみんなに会ったという流れ。そのパレードとやらをする頃には寒くなっているんだらう、そのぐらいしか分かっていないまま会場に集まった。

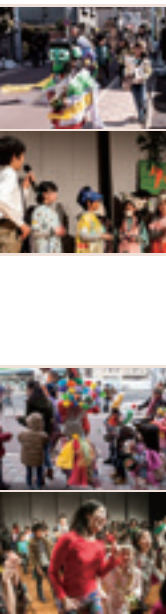
驚いたことに、何も分かっていないままだったのは自分だけではなくて、会場にいる全員だった。またよ、これは何かを思い出す。まさか闇鍋!? 二月二日に街に飛び出して鍋をしましょう、ということだけは決まっているけれど、どんな調理法で何を入れて作るか、そのためにいつ何の準備をするかなどは一切不明。それにしても、集まった素材の美味しそうなこと！ 軽やかにリズムに合わせて踊るダンサー、サカスアアーティスト、音や言葉を探るミュージシャン、不思議な色んな技を持つ大人たち、目をキラキラさせたたくさんの子供たち。この、素敵な素材をとにかく全部一緒に鍋に入れましょう。後は待つだけ。多分、何か美味しいものができますよ。

その後は素材の持つそれぞれの味を確かめ合うかのように、それぞれが持っている芸の引き出しをみんなに分かち合う、そんな日々が続く。参加アーティストのスキルや人柄だけではなく、子供たちひとりひとりの個性も大事な分かち合いの要素。ワークシヨップ中はもちろん、休み時間に見せる行動やちょっとした会話からこの子の味はこんな感じなのかも、と知ることができる。パレードのネタにするためのスキルを伝達し、練習していくのかと思いきや、そのあたりはまあ追々と。何しろ「闇」の中なので、手探りでたどり着いた感覚だけが収穫になる。誰かが何かを期待してつくった目標ではなくて、ひとりひとりが自分の力で掴んだ経験こそが到達点。でも、そんなの親切じゃないよ、とも言いたくなる。集まれ集まれ！ との呼び声を聞いて集まったはいいけど、その日の内容が最終目的であるパレードに直結しているように見えないのだもの。帰り道にふと気付く。さてはて、今日は一体なんだったんだらう。まあ、楽しかったからいいか。

後になればなるほど感じたのだけれど、目的はパレードなんかじゃなかった。ひとりひとりの味を出し合い、お互い染まりあう。「教えました、習いました。練習しました、成功しました。」の図式から外れて、もやもやし続けた後で、実はじんわり、ちよつとだけ自分が変わっていることに気付く。本当はもつとたくさん変わったかかったかも知れないし、まったく興味のない余計な味も味わったかも知れない。それに、少し取り組んだ、あの日のあのパフォーマンスこそもつと突き詰めて人に見てもらえるレベルまで昇華させたかったと感じる人もいたかもしれない。その不完全燃焼な気持ちも、アーティストを通して経験したこと、ある子がけんかをした後でゴメンと相手の子に言えなくて、代わりにそつと摘んできた花を差し出したことなんかも、全部からだの深いところまで染みて、自分の一部になっている。

パレードの日。タマのカーニヴァルは今年度のみの活動なのでパレードの終わりとはつまりみんななどのお別れなのだ。想像通り、マーチングバンドとか運動会の行進のような統一感には程遠い、ゆるーくたのしいーいご一行が通りに残る雪を避けながら通っていく。見る人、聴く人に、すごい、とか素晴らしい、とか言われることなどこれっぽっちも意識せず、ただ来週からもうなかなか会うことのできない仲間たちとの最後の瞬間を思い切り楽しむ。タマのカーニヴァルのパレードはやっぱり手がかじかむほど寒かった。でもね、本当はこれで終わりじゃないよ。みんなの体の奥に染み込んだ味がいい味出してくるのはきつとこれから後の話。

☂ パレード「タマのカーニヴァルを説明するときはとりあえず「パレードをするんです」と言うしかありませんでした。子供たちが列をなして行進していく様子はわりとイメージしやすいものです。でも何のためのパレードであるのか? といったところははずつと保留であった気がします。ディレクターの港さんには、カーニヴァルということに込めた生命への感謝とか、人間の原初的な祈りの気持ちとか、そんなところをパレードの意図するところとして置いていたかもしません。でも、結局のところ、歌ったり踊ったり自分で作った衣装や仮面をかぶったりするという営みが日常にあるっていうことを確認するために、日常の場所である街を何食わぬ顔をして歩いて行ったような気がします。





タマのカーニヴァルが行列を

宮下美穂

したということ

パレードっていうとなんだか少し気恥ずかしい。晴れ晴れと鮮やかで胸を張ってドンドンドンドンって歩くような気がする。少しお化粧をしたり、お揃いの賑やかな衣装を着たり。チアリーダーや鼓笛隊、手足がピツと伸びたダンサーたち。よそ見なんかしないし、笛の音もピーっていつたりする。そして、どう考えても、それは冬、にするものではない。

タマのカーニヴァルでは、七ヶ月の活動の最後にパレードをすることになっていた。パレード、パレードかなあ、うーん、行進？ 行進ってのはなんだかとても意志的な感じがする。チラシを作る段になって、ふとこのパレードという言葉への違和感が議論のテーブルの上に湧いてきた。

もちろん、「TRP／東京レインボーパレード」みたいにステキなパレードもある。それはわかかって欲しいことを人に伝えるためにさまざまな表現を用いてアピールする。静かな時も艶やかな時も、シユプレヒコールが響き渡る時もある。そして警察官や警察車両に取り囲まれて、進んでいく。これは路上を歩くことを権利として保証された代わりにくつついてきたこと。いずれにしてもそれは一定の表現の形式として皆に認識されて許容されている。管理されたフォーマット。それでも表現しないよりはずっといいけれど。

タマのカーニヴァルを始める前に多磨全生園に一遍上人の絵巻を見に行った。なぜ多磨全生園なのか、一遍上人なのかはとても長いお話なのでちょっと割愛。ひとつだけ、絵巻の中にはらい病を病む人、権力者、商人、遊ぶ人、子供、行き倒れる人などが描かれ、中に歌う人、踊る人が集団となって幸いを願う道々、念仏を唱えながら行き交う。それはまさに公の路上の出来事。どうもパレードとは少し感じが違う。整序されている感じもしないし、東京レインボーパレードよりアンダーグラウンドで、ルールを逸脱するというより、ルールを前提としていない感じもする。

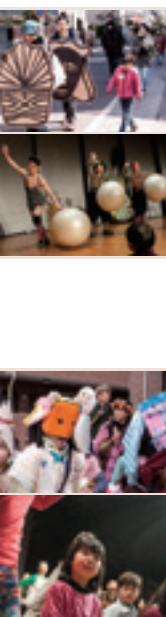
今、この社会には、いろんな名前、いろんなところの生まれ育ち、特別支援学級といわれるクラスに通う子供たちだったり、学校の書類の「保護者」の欄に書く名前に戸惑うような子供たちもいる。学校にいか

い子供も。でも、どの子供たちもこの社会の中で、この空の下で生きている。

タマのカーニヴァルは公のお金で運営されていた。その、公とはいったい何だろう？ それはみんなの意見の代表なのだろうか。権力なのだろうか。誰かが決めた見ず知らずの平均的な正しさ、なのだろうか。それは公平性を表しているものなのだろうか。いったいこの「公的なもの」はどのような子供たちに向けて、どのように再配分されているのだろうか。

タマのカーニヴァルは、この、多様な子供たちが気軽に参加することのできる開かれた場をつくることのできたのか、それは極めて怪しい。それは大きな反省。大きな反省は、公的であるということはあるゆる子供たちに開かれていてもいいということ逆照射する。

その反省を額に掲げてなお、パレードでなく行列と名付けたことを考えよう。見慣れない風体のものが路上に表れ出すことは、封印されたさまざまな大人の矛盾を露見させる。パレードが品良くフォーマットにおさまるのに対して、予測不可能な「行列」は扱にくい。予定調和ではないのだ。ヨレヨレとしていて、既成の価値観では読み取ることができない。これは何？ 晴れ晴れしいパレードは晴れ晴れしく世に許される。言ってみればそれは既成の物事を何も脅かさなから。そう、いつから、何を経て私たちは人々がぎよつとするような路上での振る舞いを、思いのままに路上を徘徊する権利を失ったのだろうか。路上は誰のものなのだろうか。歌い、踊り、言葉を唱えるその自由を、私たちは公という言葉の下に自ら失ったのかもしれない。それは、もしかしたら管理された安寧。そして規制された正しさは世の中に住む多様な子供たちの多様な存在を本当にすくいあげているのだろうか。参加した子供たちにとって、成果は何であったのかも当然議論されるべきだし、大人は大人の責任も考えるべきだ。行列した彼らに念仏を唱えながら歌い踊る、その理由があったとも思えない。どちらを向いても大人の自己満足かもしれない。ただ、彼らが大人になっても路上に佇んだ時、あれは何だったのだろうか？ とだけでも思ってくれたら、それはとても嬉しい。大人が成し得ないアンガージュマンを子供に覆い被せるつもりはないけれど、もしかしたらそこにはこの複雑怪奇な世の中を生きのびる力が隠れているのかもしれないのだから。



始まるようで始まらない感じ、 でも始まっている

田中みさよ

始まっている、と言われたら、どこか納得してしまえる感じ、だと思いました。

そこで改めて自分の中に沸く、「始まり」には何か特別なことが必要なのか、という問いと、いや、この場所は今もう特別だという確信があればいいんじゃないか、という考えと。

タマのカーニバルの、ワークショップのことを思い返すと、色々なものが全部それぞれにゆらゆらとゆれていて、実は走り止むことがないという状況があったかなと思いました。その状況、自体を中心としたその「状況」が、それを思い返す私たちにとっては何だったのでしょうか。

ワークショップからの帰り道はいつも、どこか清々しさがあつたなあ、と思ひ出しました。

場、全体が、ゆらゆらと呼吸するように、明滅するように在ること。

そこでは何かを、みんながそれぞれに、試してみていること。

とても薄い、けれども確かに「殻」であるもの、それを内側からちよつとつついて、誘われるように割ちやってみたりしている様子があつて。

常にどこかで誰かの殻がぱりぱりといっている、そんな場だったのかもなあと思いました。



🌂 はじまりかた一タマのカーニバルではみんなが並んで挨拶するというような始まりかたはありません。会場にやってくる受付があつて名札をもらって、子供たちはスイッチが入るので、そのテンションをむやみにいじらないということです。「おーい、そろそろはじめるよー」なんてことを言ったりはしましたが、なんとなく港さんのピアノが聴こえたり清水さんのタイコが鳴ったりして、ズルズルと始まっていくのです。子供たちにとっては確かに非日常の場所であつたのでしようけど、このヘンテコな時間がそれぞれの生活と地続きであることが大切で、子供たちが持っている日常のリズムをそれぞれが抱えてきてもらうために、日常と非日常の断絶はなるべくなくして、始まるようで始まらない感じだけと始まっていくのです。





タマのカーニヴァルはけの森展

宮下美穂

「タマのカーニヴァルはけの森展」が終了したその夏、同展で展示した道祖神を武蔵野公園の子供たちの集いにもう一度出現させるため、取り置いた藁を再び組み上げる作業をおこないました。八月のそう暑い暑い夏の日、藁の巨大な人形が現れた瞬間、たくさん通りがかった子供たちが不思議そうに覗き込んで行きました。作業する大人にも覗き込む人たちにも不思議な高揚感がありました。

道祖神があちこちに出現するのは、とてもよいと思います。折口信夫は、神とか他界というのはあちこちから出現するのだというようなことを言っていたと思います。出現する理由があると出現するわけですが、人がそのことをやっているのでも、出現するとその作爲はなくなってしまう。突如として、そこに不思議な空間が現れることで、世界は異化されます。

はけの森展の監修をしてくださった鳥亨さんがメールにこう書いてくださいました。ふと、これは真実であろうと確信しました。道祖神は、企画した人たちの作爲を消し去り、取り巻く空間に不思議な空気を、力を漂よわせました。足元にはタマのカーニヴァルに参加した子供たちが作った土偶が供えてありました。

タマのカーニヴァルでは、ワークショップとともに歌うことや踊ること、リズムはどこからやってきたのか、その起源を考えるため「タマのカーニヴァルはけの森展」をおこないました。この展示では、遠く、縄文の人々の、糸を縫る、編むといった繰り返しの中にある身体化された素朴な動きにその起源をみる、というひとつの仮説を提示しました。周期的な繰り返しのよって螺旋状に世界を昇華させる複雑な豊穣のもの、リズム―律動。物語ることによる異化作用を凌ぎ、身体に作用しつつ日常と異なる高揚の世界をあとというまに形づくるリズム。果たしてそれはどこから来たのか、という問い。

展示は、小金井市や多摩地域、長野県などで出土した土偶や土器、縄文編布を再現したタペストリー、現

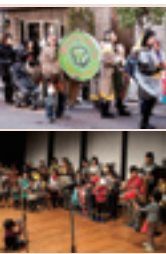
代作家による木彫、音楽家による演奏、そして子供の神様とも言われる道祖神によって構成されました。

さて、リズムの起源はどこにあるのでしょうか。

ワークショップでの音楽や踊りのさなか、そもそも、子供の世界に異化作用をあえて持ち込む必要はなく、子供は常に身の回りで繰り返される揺らぎの中であらぬものゝ真実？ を見つめているようでもありません。彼らは目の前の、あるいは心の中の世界を形作る構造の揺らぎや曖昧さ、逆に確かさを、既成概念にとらわれず直裁に、確かにとらえていたような気がしました。音が生まれリズムが刻まれる、歓声や笛や太鼓の音、発せられる言葉に囲まれた中にある一瞬の裂け目のような静謐を、彼らは容易につかまえるように見えました。道祖神の出現が持つ意味を子供たちはその身の内に備えており、むしろ、世界が異化されることに直面し、その豊かさを再確認する必要があるのは大人なのだと。

野原で火にくべられる道祖神は、どこか嬉しそうでもありました。人が野で踊る自由を手放し、どこに向かうかとしているのか、その一万五千年に及ぶ道程には人とリズムにどのような出会いや豊かな創造、あるいは喪失があったのか、そして、この道はどのように進むのか？ リズムの起源を問うことは、とりもなおさず私たちの未来を問うことでもあったようです。

同時に子供たちとじっくり向き合うことは、一万五千年前に遡らずとも、リズムの起源に遭遇できる、リズムの起源は子供たち自身にあると確信させるものでもありました。彼らはリズムの向こうがわにある世界をリズムを通じて感知し、そこに身を委ねることができ、より広い豊かな音楽の世界と出会うことができる心と体を（未だ）保持しているように思えました。リズムの起源を、未来を問うこと、そして子供たちの身体の中のリズムを確信し、大切に慈しむこと、その積み重ねがつくる世界の可能性について、燃えていく道祖神の傍で夢想しました。



遊びか祭りか

タマの子供のカーニバル

金井圭介 — サークラス・アーティスト(タマのカーニバル参加アーティスト)

子供の頃の遊び方

子供たちに飛び蹴りされたらどうしよう…。バリケードを張られたらどうしよう…。タマのカーニバル(略してタマカ)の企画に誘われたとき、僕の住む長野県の児童館で、本当に起きている話を思い出した。その児童館では、学校が終わると、子供たちが一〇〇人以上来て、上級生を中心に廊下にイスを組み上げてバリケードを作ったり、そのことを注意する口うるさい先生には飛び蹴りを食らわせる、なんて話を聞いていた。

でも、思い出してみると、僕らも子供のころは、それに近いことをやっていたかもしれない。空き地で子供たちだけで焚き火をしたり、消防団の倉庫に潜り込んで、消防車のホースを全部引っ張り出したり、言えないことは他にもたくさんあるけど、(みなさんやったことがなければすみません…)大人にストレス発散が必要のように、僕らの子供時代もストレスを発散するため、こっそりと派手なイタズラをしていた。まわりや社会に迷惑をかけて申し訳ないと後になって反省したが、そんなことも遊びのひとつだった。

楽しく子供たちに遊ばれよう

タマカも大勢の子供たちが参加していたけど、飛び蹴りされることもなければ、バリケードを張られてコミュニケーションがとれなくなる、なんてことは起きなかった。反対に子供たちはほくら大人とよく遊んでくれた。もしかすると子供たちは「遊んでもらった」と思っているかもしれないが、とんでもない。「ぼく

らが遊ばれた」し、遊ぶ感覚を引き出してもらった部分は多いにある。

子供たちとの距離感がわからず、最初のうちは大人としてカッコつけない部分もあったけど、そんなのはすぐに吹き飛んだ。僕ら大人が失敗することに子供たちはみんな大喜びだったし、プロのミュージシャンの中には、子供たちに馬乗りされ「ウンコマン」と呼ばれ、実は本人もまんざらじゃなさそうだったし、大人たちは「もう、どうにでもしてくれ〜!」と受け入れざるをえない状況だった。

遊びに求めるクオリティ

僕は主にパフォーマンスやダンスを担当していたけど、最初は人数も全体で五十人を超えていたし、とにかくうじゃうじゃいて、名前なんて覚えられないし、みんな元気だし…。休憩時間は疲労困憊。ワークショップ後の会議でも、話を聞きながらも耐えられないほどの睡魔に襲われていた。

いやー、ほんとに眠かった。一回終わるごとにヘトヘトだった。そのぐらい子供たちのエネルギーも、港さん率いるバンドの演奏もパワフルで、毎回小さなカーニバル/お祭りだった。

子供はエネルギーを制御することなく、楽しくなると一〇〇%以上のエネルギーを出してくるので、こちらは一〇〇%以上のパワーと知恵で対処する。そうこうしているうちに過去の経験からくる知識と知恵も、あつと言う間にカラッポになってしまった。

とにかく前半はいろんなことをやったが、どこに向かおうとしているのか、霧の中を歩いているようで、教えることも、だんだんなくなっていく、自分の経験



の引き出しもたいしたものが見つからない。もう、どうにでもなれ、と思考を手放して、他の講師メンバーと打合わせはするものの、あまり細かく準備をしなくなった。

技術の習得を目指してやってもつまらないし、それはもっと成長してからみんなが本当にやりたくなくなってからやっても全然遅くない。それよりも自分たちの知らないことを、楽しみながら経験することのなんと大事なことか(自分もそのことに改めて気づかされた!)

とにかくいろんなことを経験して、違う遊びをやつて、みんなでなにかを作つて発表する。発表に楽しさのクオリティは求めても、技術のクオリティはついてくればいや、ぐらいのスタンス。瞬間になにかを説明して、遊び続けることのおもしろさ(子供の頃は、みんなそうやって遊んでいたはずだ)。

遊びを見せるということ

そんなタマカの進むべき方向が見えてきたのは、学芸大学での「公開ワークショップ(中間発表的なもの)」あたりだ。

使わせて頂いた大学の講堂は、六角形の空間にス

テージがあつて、コンサート会場にもみえる。そこで子供たちとステージに立って歌い踊っていると、ちよつとしたスターになった気分になったし、発表の時は子供たちを見守る親も、客席からスタンディングと一緒に歌って踊つて、空間全体がひとつの生き物のようにみんなのノリで震えていた。そして、外での疑似パレードでは、自由に緩やかにみんなでリズムを合わせながら、屋内よりさらに解放された子供たちの姿をみる事ができた。その瞬間に生まれた、どこかの村のお祭りに紛れ込んだ感覚。

そして、楽しかった公開ワークショップを機に、二月の「大行列」に向けた準備が始まった。衣裳づくりやお面づくり、旗を作ったり、グループ分けをしたり、進行を決めたりと、保護者も巻き込みつつの準備は、文化祭さながら。大雪に見舞われ、すべてがスムーズに進行したわけではないけれど、衣裳も小道具もとにかく大行列には間に合わせることができた。

イメージは「大行列」

ドンドンドン! ダンダダン! と威勢の良い太鼓の音に合わせて、歌ったり、掛け声だったり、グ





ループごとの練り歩き方で、小学校からフェスティバルコートまで歩いてゆく。車の通行もあったり、道ゆくひととすれ違ったり、大声を出さないとお互いに聴こえないぐらいで、子供の頃のお祭りを思いだした。広場では一輪車だったり、当日参加グループのサプライズパフォーマンスであったり、リハーサルもなく突然ではあったけど、当日ゲストも道ゆく人も巻き込んで、まさにタイトル通りの「大行列」!

屋内の発表は子供たちの司会で、人形劇や演奏、パントマイムなどが進行してゆく。ゲストの歌やパフォーマンスも行われ、クライマックスの「タイコ」では、あのタマカの空間にいた人たちも全員参加の大合唱と踊り! 「こんな人いたっけ?」と、見たことないようなオジさんたちも加わり(たぶん子供たちのお父さん、おじいちゃん)理屈抜きに多に笑い、叫び、踊って、みんなで楽しんだ。全体の進行も、子供たち自身の力で進んでいく部分も多く、講師としての達成感というよりも、単純にその場にいる参加者として楽しかった。そして、要所所で参加してくれて、当日ゲスト扱いのくるくるシルク三人が、終わったあとに「楽しかった。こういうのだったらまた参加したい!」とうれしい言葉を連発してくれたのも心に残る。

子供たちが作り出したカーニヴァルで大人も楽しむ。これぞタマのカーニヴァル。

未来に向けたカーニヴァル

僕らのエネルギーは、放出し続けないとガスが溜まっていく。ガスが溜まるとストレスとなって、そのまま放っておくと病気になる。でもエネルギーは本来楽しいもの。そのエネルギーをタマカでやった楽しい遊び。歌やダンスやパフォーマンスで表現していったら幸せだ。まわりのみんなを巻き込んだり、巻き込まれたりしながら、この先も、家庭や学校、社会のなかでタマのカーニヴァル的なイベントを起こして欲しい。そして、僕の個人的な希望。いつの日か、今度はみんなにタマカのようなことを企画してもらって、おじいちゃんになつてるかもしれないけど、ぜひ呼んでもらいたい。

ではでは、その日の為に体力づくりしときます!!!

かない・けいすけ | 八二頁参照

飽きることからまた始まる

澤和幸 | ギタリスト(タマのカーニヴァル参加アーティスト)

飽きることからまた始まる。飽きてからの、「始まり」の入口がいくらでも転がっていたワークショップだったのかもしれないね。最近のゲームなどは数秒間に一度は何らかのわかりやすい進展をプログラムさせてあり、誰もが常に飽きないように作られているようですが、リズムや音楽は単調であったり全部がひとつだったり、最初は思うようにコントロールできなかつたりと、慣れるまでその奥深さは気付きにくいものです。でも、飽きても違う方向へとそれて楽しんで、結局はそれぞれが違う方向から最初に飽きたものを続けている。そんな感じのワークショップだったように思います。それは計算されたり用意されたものではなく、ゆつたりとした時間と賑わいの中に次の入口が見え隠れするような。子供たちは自分の居場所というかポジション、居心地のいい役割りみたいなものをそこでコソッと見つけるような。

例えば大勢の中で他者と比較されるような状況の中で飽きてしまったらそこで嫌になって終わるしかないわけです。大人も子供もそんな感じで、誰もが何かを始めれば必ず飽きがやってくるわけですが、そこは根

気や我慢で打破するよりもちょっとした気分転換や次なる新鮮味がストレスなく必要なわけで、根性論もいけれどそれは自分の内的問題ではなく例えば少しツールが良くなるとか、小道具が増えるとか、工夫したら少し良くなるとか、新しい友達と触れるとか、調子のいい友達に同調するとか、あるいはそれらの予感的なものだけで自然にテンションは上がったりするのはないでしょうか。それもひとつのステップアップへのコツでもあるわけです。とにかくワークショップは授業でも道場でもないわけだから、ノッてるもよし、飽きてもよし、そういうゆるく自由な中で次へのキッカケに満ちていたワークショップであったことは確かでした。

例えばワークショップの初回はそれぞれの家庭にある鍋やフライパン、空き缶に始まり、それがタイコに進化していったわけです。そしてオリジナル曲を歌って叩いて、またさらに踊りが付いてきたり、そしてまた「こんな曲ができたんだよ」みたいにあって完成した曲を提示してみたり。今思うとみんなで作って完成したタイコや考えて導入された振付けが加わったときの





雰囲気があったからです。

大人の役割

実はスタッフでありながら自分も飽きやすい性格のため、「何かを指導しなくては」みたいな使命感にすぐ飽きてしまい、子供たちと安易に戦闘ごっこや鬼ごっこみたいなやつをよくやっていましたが、実はいい具合にこれがグルーヴの根源を産むことにもなりました。テンション上げて賑わいを作っただけで「は

みんなの音楽は明らかにどんどん楽しくなるし、工作・創作キャリアを経た後の音楽表現は自信に満ちてくる……これはあくまで想定内の話で、うまくいけば表面上ワークショップはそうなるでしょう。でも人によっては、やらなければならぬことが「音楽」だと認識しただけでイマイチ最後まで溶け込めない人もいます。僕が子供の頃はそうでした。今でもそうかもしれない。今回のものが予想外にユニークだったのは、選択肢やポジションを与えられるのではなく、時間をかけて自分で見つけられるような空間と

で弾いたり。小学校の音楽の授業ではあまり見かけない珍しい楽器かもしれないし、その機動性と形状も魅力的だろう。語りかけるような音に耳を澄ませながらみんなで歌うという風景も今回は微笑ましいものでした。

い、歌いくよー！」でOKだったわけです。自分もこの寛容な雰囲気助けられました。
僕はこのワークショップの間、子供たちから「ウソコマン」と命名され、自発的に変態おじさんキャラを存分に発揮してきました。それは「素」でもあるわけですが(笑)。その由来は開催初日にトイレにウンコしに入った場面を子供たちに見られてしまい、「ウンコいっぱい出たぞおー！」とみんなを追いかけ回したためです。で、まずウソコマンは身近でアホな大人と認識されます。ところがいざ楽器を持つと、ちゃんとすごい演奏するんだぞ、という姿を見せようとも思いません。「あ、ウソコマンすげえ」みたいに。それがうまく伝わったのか、あるいはちゃんと演奏できたのかはわかりませんが、ある意味、大人の凄さ、大人のワザみたいなものが伝えなければ、と。しかも演奏している姿がカッコよく、楽器が演奏できるが故に仲間と楽しく音楽でコミュニケーションしている姿を。「早く大人になりたい」と、どこかで思ってくればいいわけです。「大人になりたくない」ではなく。大人になっても楽しいことがいっぱいある。大人が音楽で楽しむ姿ですね。

楽器が自由にする

今回は会場の都合もあり、ほとんどピアノがない状態でもありましたが、とにかくギターや多くのパーカッション、バンド形式を持ち込んだことは大成功だったと思います。ピアノはどうしても音楽の授業を再現してしまうのかもしれない。ピアノはベース、コード、メロディ、リズムなどを同時に演奏可能な楽器で、しかも全体音量や音量バランスまで自在にコントロールできる万能性があります。広い体育館などで散らばって遊んでいる子供たちを束ねてまとめる統率力があり、どこの学校にも配備され、誰もがピアノ伴奏に親しんできたはず。ただ普通にひとりの指導者のような伴奏者と、それに従う多数の関係。歌うときはみんながピアノの周りに集まり、その関係は刷り込みからかなりアカデミックでもある。ギターは不器用で生音では音量も小さいけれど、どこまでも気ままに人に近づいていける。あっちで弾いたりこっち

また、バンドやバンドで使うドラムやベースに興味を持つ男の子も印象的でした。僕も音楽の授業が大嫌いでしたが、逆にロックやポップスのバンドに興味を持つようになった人間なので気持ちはわかります。だいたいピアノ伴奏でみんな真面目に歌うのを嫌うのはヤンチャ系の男子なんです。で、彼らはバンドにくっついてしまい、最終的には大人のバンド・メンバーみたいなになっていたのですが、それも含めて差別感なくみんなのポジションができていったこともすばらしいことだと思います。そして港氏の楽曲やアイデアがポップでありながらも決して子供に媚びたものではなく、常に子供のちよつと先にある、何か予感をくすぐるようなものであったこともみんなが演奏や踊り、バンドに入りたくなる要素を多く持っていたのかもしれません。

子供が好奇心と共に何かに触れた瞬間から同条件下にある他者との比較がそれにくっついてきてしまい、遠慮したり馴染み遅れから身を引いてしまう。強引にイける人、調子に乗ったモン勝ちという言い方もできるかもしれない。が、今回のワーク・ショップは時間的余裕もあり、良いのか悪いのかユルさに満ちており、個々にとっての比較の場が決定される基準もなく、オープンな状況の中で港氏をはじめとする個人的なスタッフによる謎のアトラクションがポロポロと提示され、そこからそれぞれの得意を見つめる。そしてそれぞれが「それ、やりたい」を経て「これはまかせろ」に変わっていったことだけは確かな実感としてはあります。ワークショップが終わってからは、今後それがどのような形でどれほどの成果を生み出すのかはやはり謎なのではありますが(笑)、こういう、ほくそ笑む「謎」で終わるのは、なんか、いいことですよ。

さわ・かずゆき——八二頁参照



寄る辺の無さ、 無形の岸を遠くまで歩くこと

平井航一 人形遣いタマのカーニヴァル参加アーティスト

ワークショップに関わる度に「鹿踊りのはじまり」という物語を思い出します。

野原には、嘉十という男が食べ残した栃の団子と白い手拭いが落ちていて、それらを六疋の鹿がぐるぐるぐるぐる環になって様子を伺っていました。鹿たちの好奇心や躊躇、決心や驚きを乗せた足取りが、摺る音、踏む音、跳ねる音の拍子となり、息遣いや漏れ出る声が詩になって、ついには興に乗り節を得て唄になりました。同じ様に仕草や動きは踊りや舞へと繋がってゆきました。その様子を眺めていた嘉十は、北風に揺れ夕日に輝く薄の穂までが一緒になってぐるぐる踊っているように見えたとき、自分と鹿との違いを忘れて踊りだしていたのです。

唄が唄、踊りが踊りとしてのみ存在するのではなく、私たちの暮らすこの環境との交感から、日常の行為、繰り返される仕事、私たちの身体の中から生まれて来はしないか、度々そんな在りそうもない光景を想像します。

タマのカーニヴァルに参加した子供たちは、ある部分においては、あの鹿たちや嘉十に似ていたかも知れません。不思議な大人たちを前に、興味を示したり、見向きもしなかったり、思い切って飛び込んだり、逃げ出したり、またはその様子を外から眺めながら、只々懸命に過ごしていたのです。

勿論、このタマのカーニヴァルの日常が唄や踊りに結実したわけではありません。そうする為には、私たちの「表現」はあまりにも日常から遠く離れすぎていますし、その私たちの日常や身体はあまりにも多くの物を忘れてしまったようです。「鹿踊りのはじまり」

劇」の場合も同様で、彼等の思うままに自由に振る舞うという方法を選択すると、学芸会等で見知った方法に偏り発想が不自由になりました。そして、その方法を手放してしまうと途端に為す術が無くなってしまいました。

それ故に、この朗読劇の構造は、子供たちの共通の記憶を一度手放してもらうことを意図して、見慣れぬ「借り物のコラージュ」（＝ネイティブアメリカンによる「馴染みのない」概念の詩、「聴いたことのない」アフリカのリズム、「体験したことのない」強い足踏みを主とする横ノリの踊り、長い棒が付いた頭と布製の胴体から成る「触れたことのない」人形）で組み上げました。子供たちの反応は、好奇心、躊躇、拒絶、タイコだけ叩くという子や人形だけを遣うという子、あの鹿たちの様に様々でした。まずはこれらに正面から取り組んでもらいました。詩

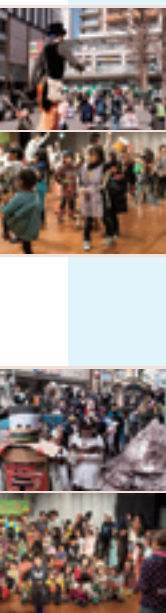
で描かれた世界は、即興的に歌い合ったり、踊ったりすることが自然に行われていた時代のこと。生活や行動様式や感性が時間をかけて形成され、共有されている世界での出来事です。私たちは最早そういう世界に生きていくわけはありません。私たちは良くも悪くも個々の社会に暮らしていて、共有しているものは大変少なく儂げで、つながりを促されながらも刺激すれば容易く張り裂けてしまうような心を互いに気遣い恐れながら生きてようにも見えます。芝居などの創作の現場でさえ、それぞれが持ち寄る方法や身体は不安定で、わずかに存する共通項さえ頼りなく、共に作っていく為の「寄る辺」の無さを感じます。しかしタマのカーニヴァルには、唄や踊りには成らずとも、そこには様々な存在をまとめて包摂する私たちなりの姿勢が生まれつつあり、またそれを待つことが許される緩やかな時間と環境があったように思います。

見慣れぬことをする

そうした「タマのカーニヴァルの日常」の終わりに、発表会へ向けて子供たちと一緒に「詩の朗読劇」を作るという役目を任せました。作品としての体裁や主題は半分棚上げにし、子供たちが積み重ねた時間を反映することを第一とし、共同製作の中においても彼等が自由に動き、偶然に対して開かれた状態になるように心がけました。今述べたこととその方法の間には矛盾がある様に思われるかも知れませんが、私は先ず、一例としてのリズムや動きの指示を含む台本を作成しました。何故ならば、何か物を作る場合には只々直感に従うことが、その意図に反して、自分を不自由にしてしまうことがあるからです。この「詩の朗読」を皆で読むことで意味の分からない部分を解決したり、難しいリズムに挑戦したり、どうやったら上手に人形が動くかを研究したり。

繰り返すことで変わっていく

繰り返し稽古するうちに、私が作った台本は彼等によって部分的に改訂されていきました。このように繰り返すことには大きな効能があります。いつもの道を歩きながら、日々のわずかな違いを見つけたら、ふとしたことから枝分かれをして遊びが始まるという体験もまた楽しいものです。台本が改訂されたのは繰り返しすうちに生まれる違和感の原因であり、難易度を下げたためでもあったのですが、七十五拍子のアフリカのリズムは四拍子になり、強く足を踏む横ノリは飛び跳





ねる縦ノリに変わりました。その様子にはあっさりとして子供たちの間で合意がなされた感があり、彼等に共通する身体感覚の外殻を見せてもらったようで、大変興味深いプロセスでした。これには、音楽家たちを含めた殆どの大人たちがこれを日本のリズムと勘違いしていたこと、他のグループの子が家で真似をしていたという微笑ましいエピソードも加わり、非常に印象に残っています。

リズムに大きな変化があった後、台本をみんなで開いて今までに決まった事柄を確認し書き留める作業をおこなうことで、自分たちの身体から出て来たものを「客観化」「共有」する機会を設けました。言うまでもなくこの作業に飽きてしまう子もいましたが、おもしろいことに低学年から高学年まで総じて前向きに取り組んでいたように見えましたし、音符での記述を試みる子もいるほどでした。残念なことは、ここで記述する項目として上がった事項はあくまで私が客観的に把握出来た範囲であったということ。劇といえども同じ経験を二度味わうことは出来ません。多くのことが同時に発生する劇中の印象を、彼等のひとりひとりが繰り返す中で見えて来た微妙な差異を、絵でも図でも言葉でも、それぞれの好みの方法で皆に伝達し作品に反映することが出来たとしたら、「借り物のコラージュ」であった台本は、いつか彼等のものになっていたことでしょう。

そしてこの取り組みを「本物」にしたのは、図らずもメンバーの流動性でした。日程と天候の影響を大きく受け、役割を固定することが出来たのは極々限られ

た子で、本番当日のみの参加という子もいるほどでした。この状況は、稽古を重ねていく上でプロセスや記憶の共有を困難とするゆえに、作品の同一性を脅かすものに成りかねないのですが、それに反してこの朗読劇は次第に重みと包容力を獲得して、二日にわたる発表会の間にも深化し続けていたように思います。発表会の後、稽古と本番を通じて一回だけの参加だった子も充実した顔で帰って行ったこと、両日とも参加した子供たちがそれぞれの回が違う経験だったという感想を話してくれたことは、彼等が経験した実に大切なことを示唆しています。

それは、彼等が「馴染みのないもの」と対峙しながら肉体化した「作品」が新たな参加者を許容し、更にはそのイレギュラーを含む大小の差異を感じて楽しんでいったということです。その差異を楽しむ包容力を生んだ要因は、行方を繰り返すことであつたのではないのでしょうか。この繰り返しは、熟練を目的にするものではなく、毎回状況が変わる「混沌」のなかを同じ軌跡でぐるぐる廻りながら、その度に発生する差異を作品中に有形無形の記憶として記述し続ける行為です。

子供たちが、自分（自分たち）の姿を確かめ、定着させ、混沌の渦に飛び込むことを繰り返し、また繰り返し、それぞれの違いを楽しみながら、いつか彼等が思いもしなかつたほど遠くへ行き着くことが出来ればと願っています。

ひらい・こう——八一頁参

多面体プロジェクトが放つもの

「ゴール」に帰結しないホール発表

小山文加——音楽教育研究/アートマネジメント

「子供らしさ」とは何でしょうか。

屈託のない、無邪気で明るい笑顔、きらきらと輝く瞳——。こうした様子は、子供とふれ合う中で確かに感じられるものです。しかし、かくも子供が純粹でまっすぐだと単純に言い切ってしまうのは、性善説と「大人の期待」により過ぎという気もしてきます。通年を通しておこなわれたタマのカーニヴァルでは、子供とアーティストがいろいろなことを経験し、感じ、動き回っていました。そこは、「大人の思う子供らしさ」や「社会の求める子供の姿」に関係なく——むしろそうしたものを取っ払って——ふるまう場だったかもしれません。わけの分からないものにあふれているけれど、とても生き生きとした世界。抽象的な表現になりますが、タマのカーニヴァルはそうした世界に子供が接近するよう意図されたプロジェクトだったと考えています。オリエンテーションから総集編まで（すべての回ではありませんが）、わたしはワークショップを継続的にみてきました。ホールでの発表は特に印象に残っています。

タマのカーニヴァルは二〇一三年の夏に始まり、総集編として市内の「大行列」とホールでの発表が翌二〇一四年二月におこなわれました。その月は上旬に二週連続で大雪が降り活動にいくぶん制約がかかったこともあって、発表当日、最終的にどういう様相になるのか予想のつかないままわたしは小金井市民交流センターに着きました。平土間のホールは大きく左右のブロックに分かれ、真ん中にピアノや楽隊が配置。そこで子供たちによって織りなされる多様な表現。それぞれのパフォーマンスから送り出されるエネルギーはふだんのワークショップのときよりもいっそう充実した質量をもつものを感じられました。自分の中にどん

どん膨らんできたある種の驚きと静かな感動。それは、一連のワークショップで繰り返し広げられてきたことが、発表の場にどう現れたかという点に集約されます。

「発表」の位置づけ

もともとこのプロジェクトにおけるホールでの発表の位置付けは、中・長期的に実施される教育プログラムの典型からは少し外れていました。近年、複数回のワークショップから構成されるプログラムでは、参加





時間と空間をデザインする

一九九〇年代以降、劇場やホール、NPOによるワークショップや教育プログラムと呼ばれる実践は大きく発展しました。超高齢社会の日本において子供は未来への希望。社会全体から見守られ育てられる存在です。芸術関係機関が教育プログラム等の充実を図るのも必然的で、まもなく音楽、美術、演劇など各ジャンルで特色ある実践が知られるようになり、単発の企画に加えて長期的なプロジェクトも増えました。二一世紀に入ると映画『千と千尋の神隠し』の千尋に象徴される「生きる力」を培うことが学校教育で重視され、コミュニケーション教育推進の潮流の中で、アートがコミュニケーション能力向上に資するという側面も注目されています。しかしタマのカーニヴァルはアートそのものの普及を主目的とせず、具体的な成果に結び付くような学びの場でもなく、体系だったメソッドに基づくワークショップにも当てはまりません。そのうえ、ホールでの発表には地域の文化団体のパフォーマンズのコーナーも設けられていました。学術的な視点で特徴付けるならば、タマのカーニヴァルは子供向けの教育プログラムともコミュニティ・プログラムとも言えるでしょう。当日参加の団体もやわらかに自然と巻き込み空気は、どこから？これがわたしの心に引かれたもうひとつの不思議でした。

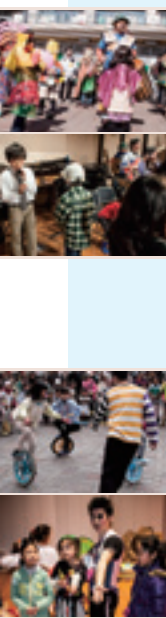
タマのカーニヴァルの多面的な性格は、参加アーティストの多様性と表裏一体です。音楽家やサーカス・アーティスト、人形遣いなど多様なジャンルのアーティストが、原っぱで遊んだり、歌ったり踊ったり、粘土で仮面をつくったり、一輪車に乗ったりしていました。いったい彼らは「何者」なのか、何をやるうとしているのか。保護者の方々の中には、ふと不安を覚えた方もいたのではないかと思うくらいです。しかしタマのカーニヴァルを「わけの分わからない場所」にしているのがアートでありアーティストであることが、子育て支援を主目的に子供の居場所をつくるような活動などとはっきりとした違いと捉えられます。そこは、アートNPOによる時間と空間をデザインする営みによってつくり出された場所。たくさんの方

者がある目標を共有して例えばお芝居や歌の練習を重ね、成果発表の場として本番をむかえるという流れがひな型のひとつになっています。タマのカーニヴァルの場合、ホールでの発表は通年編のワークショップのアウトプットのひとつという捉え方がされていました。総集編は「達成すべきゴール」ではなく、発表の具体的ななたちが初めから決まっていたわけでもありません。タマのカーニヴァルは多面体です。このプロジェクトにとっての発表は、それまでのワークショップで子供とアーティストがついできた時間と関係性のさまざまな側面を、プリズムのように放つこと。あるグループは不思議な物語のお芝居で、あるグループはまっすぐに伸びる歌声で、あるいはふわふわと舞う風船を使ったパフォーマンスで、会場のみなどと楽しく踊ってもりあがって。いつの間にかこういうかたちに変容していたのだろうか？この驚きは、ワークショップを通してアーティストと子供が何を積み重ねてきたかという問いに置き換えられるでしょう。さらには芸術団体やアートNPOが通年規模でワークショップをおこなう意義をどこに見出せるかという問いにもつながってくると思います。

が輪になって座る様子はまるで絵本の一場面のように、その日わたしは驚きや不思議、そして穏やかであたたかいものをもって家路につきました。

おやま・あやか——東京藝術大学音楽学部特任助教、一般財団法人ヤマハ音楽振興会ヤマハ音楽研究所研究員。音楽史、教育学、アーツ・マネジメントを学び、芸術団体による教育プログラムの運営、文化政策に関する調査に携わる。東京・東大和市生まれ。博士(学術)。

大人の目に囲われている子供が型を解き放つかもしいない、「違うこと」を受け容れる引き出しを増やしたかもしれない場所。引き出しをひらく鍵にはいつもアートがあること、そして動き回る子供を大人がいつも「みている」こと。各回のワークショップでそれが繰り返され、つくられた関係性の豊かさが、ホールでの発表に作用したのではと感じています。発表が終わった後、総合ディレクターの港さんを中心にみんな



イメージを超えていくレッスン

戸館正史 — (ポシちゃんタマのカーニバル制作担当)

届かない先に届けること

ある美術館学芸員から聴いた話だ。その美術館は子供向けのワークショップを定期的に開催していて毎回定員を超える応募があるそうだ。ワークショップの日程を決めるにあたっては地域のイベントや学校行事などと重複しないように調整して、市内の全児童にチラシを配布するという念の入れようだ。ある日のワークショップで、これまでになく参加者が集まらないことがあった。「学校行事もないし、大きなイベントもないのになぜだろう?」。いろいろと調べてみたらその日は中学受験の全国統一模試がおこなわれていたことが判明した。「薄々わかっていただけけど、やっぱり私たちはそういう家庭の子供しか相手にしていなかったのか」とその学芸員は愕然としたという。そう、私も薄々わかっている。子供たちを募ってワークショップをしても、ピアノが弾けたり、ダンスが得意だったり、習い事をしている子供たちが集まってくる傾向にある。なかなか残念なことであるが、こうしたことをやろうとすると、そんな応募状況が前提であるということとは、もうほとんど織り込み済みで、ではそういうなかで何がやれるのかということを考えなければならぬだろう。それぞれの子供たちの家庭環境やバックボーンを仔細に知る由はないけれど、タマのカーニバルは子供たちの属性や経験値によるアドバンテージみたいなものが活かされる場にはなっていないかったかもしれない。同じように「子供であること」が優遇される場にもなっていないかった。そうなる、もはやそこに集まっている子供たちの属性も経験値もグングンと後景化していく。あまり関係のないこ

とになっていく。もちろん、学校の教室のように、否応なしにいろいろな子供たちがいた方がよいのだけれど、子供であろうと、大人であろうと、そしてアーティストであろうと、互いが目の前にいるということを認めなければならぬ状況になっていることが何よりも大事で、もしかしたらそれはちょっと居心地の悪い猿山の露天風呂みたいな状況だったかもしれない。でも、そこにいるのは間違いなく出会いたい子供たちであるのだ。

それにしても、そもそもアートと言うだけで届いていない先との溝が深まる気がしてならない。例えば「反戦! 平和!」と叫ぶだけで、逆サイドの人たちが一層反発するのとよく似ていて、アートをそもそも生理的に受け付けてくれない人たちが確かにいる。それは音楽や演劇やダンスや美術そのものへの嫌悪と言うよりも、なんだかかわからないアート全般に対する無関心に近いものかもしれない。関心のない人たちを無理やり引き込む必要などまるでないけれど、立場や意見の違うもの同士の間にある溝を埋めることは難しいし、溝を埋めてしまうことでは単一的な価値観がまかり通ることになってしまう。だから、大事なのは溝があることを知りながらも、その溝をヨイシヨと行き



来できるような風通しの良さだ。それは対岸の価値を知ること、他者の嬉しいことや辛いことを感じることだ。まるで道徳で謳われることを言っているみたいだけれど、教科化へまっしぐらな学校の道徳では、「他人の気持ちになって考えて、仲が悪いなら仲良くしよう、手を取り合おう」と論ず。その一方で絶対的な「正しいこと」を論ず。世界中でたくさん起きている「正しいこと」と「正しいこと」の衝突はあまり想定していないようだ。そしてまた、残念ながらアートなるものも、それぞれが独自の自律的な価値を主張するきらいがあり、「あれはアートだ、これはアートじゃない」みたいなこともよく耳にするし、「わかる」とか「わからない」とかで語られがちなのもアートだ。だから、アート側がアートなる看板を外して「どうもこんにちは」と、まるで言葉を携えるかのように、音やカラダを携えて対話することはできないのだろうか。まずはそんなところから始めたならば、音楽やダンスや美術は溝の間の緩衝地帯となって、互いに「まあ、いいか」と歌ったり踊ったりするようにはならないだろうか。いずれにせよ、「反戦! 平和!」とシユプレヒコールをあげている人たちも「憲法改正!」と意気込んでいる人たちも寛容性と許容性を持たねば衝突はいつまでも絶えないだろう。とは言っても、政治的なステージでは双方が互いをおもんばかるという状況は残念ながら生まれにくいからこそ、音楽やダンスをすることでシミュレーションするのはそんなに悪くない考えのはずだ。そこではまず、アートという言葉に内包されている不寛容性を取り払わなければならない。逆説的ではあるが、やはり一般的に流布しているアートのイメージは特権的であるし、特権的であるがゆえに一部のヒエラルキーの享受で成立してしまっている側面がある。そしてそれゆえに無関心が生じている。とにかく寛容性に満ち満ちた場であるということを謳うしか、届かない先に届けることはできないかもしれない。

マニュアルは要らない

では兎にも角にもタマのカーニバルができることはなんだったのだろうか。世間ではタマのカーニヴァ

ルのようなプログラムはアートワークショップという括りの中に入れられてしまう。周知のように、そもそもワークショップという手法が日本で盛んに用いられるようになったのは、市民参画型のまちづくりの現場においてである。行政主導型の公聴会のようなものではなく、多様な意見をすり合せながら、地域の課題を解決したり、そうした活動に基づいてまちづくりの計画を立てていくこの手法は、小さな単位におけるリアリティを伴った民主主義の形態のひとつだ。このように多様な意見を尊重しながら、錯綜する課題に筋道をつけて問題を止揚していく方法は効率的ではないが、答えをひとつに求めないアートの現場との相性はよく、音楽や演劇表現を手段とした参加体験型学習方法としてアートワークショップは定着していくことになる。定着するということは方法論化していくということでもある。この手法が一般化され広く有効に使われるためには必要なことだけれど、既定された方法論や目的を設定することなく、試行錯誤の内に関係性をつくっていくような場所があってもよいはずだ。そうであればまるで学校教育の現場ではないか。学習指導要綱や指導方法に縛られ、こういう子供にはこういう指導のようなマニュアルすらある学校教育の現場ばかりではないだろうか。残念ながら年々学校現場が管理型社会となっっているのは周知のとおりだ。だから方法論は使いたくない。マニュアルがあっては学校になっってしまう。ここで私は灰谷健次郎の小説『天の瞳』の一節を思い出す。





「このやり方がその子にとって一番良いんだと思っ
た時は、もうその時がその子を理解する終点になって
しまっていると思うのね」。

大人が子供と向き合うときは迷いなく正しい姿でい
ることなんてなくて、一緒に逡巡しながら、ゆっくり
コトを進めていくような態度もあってよい。いつも現
在進行形の人と人との向き合い方というのは面倒臭い

ものかもしれないが、これは制度から離れたタマの
カーニヴァルのような場所だから可能なことだったわ
けだ。

ワークショップのオルタナティブ

一般的にワークショップという方法論が音楽や演劇
やダンスなどを手段とするものであったとき、そこ
には必ず参加者の身体への介入がある。つまり、知識偏
重の学習に対するアンチテーゼである参加体験型学習
方法としてのワークショップは、身を持って体験して
みることから始まる。十五年ほど前に出版された中野
民夫の著作『ワークショップ 新しい学びと創造の場』
〔岩波新書〕は、ワークショップの普及に大いに貢献し
た今や古典的文献だが、ここでも「体験学習法」が紹
介されている。ワークショップのプロセスにおける経
験を必ず言葉にしたり参加者同士でフィードバックし
たりする「ふりかえり」という作業が入ることで、体
験を客観的に把握し、一般的な理解へと繋げるとい
う「循環型の学習法」だ。これは多くのワークショップ
の現場で見受けられる定型で、それ自体は学習の場
として座りのよい構造となっていて否定する気など毛
頭ない。確かに身体的な実感を伴った経験は大事なこ
とだ。そうやって私たちは経験を堆積していく。そし
てここでは身体的経験を最終的に言葉にしたり思考す
ることで経験を経た知識が身体に刻まれていく。例え
ばスポーツでも楽器の演奏でもダンスでも、理屈抜き
に体験することで強度のある技術や知識を会得するこ
とだろう。ワークショップにおける身体への介入は当
然ながら強制もないし、一方的なものでもないけれ
ど、他者が他者の身体的経験を方向付けることは、乱
暴な言い方ではあるがちょっと軍隊的、あるいは体育
会的とも言える。「体験学習法」の導入の部分では、
身体を用いてゲームだったり自己紹介だったりをして
参加者同士をリラックスさせることから始める。アイ
スブレイクといういわば準備体操だ。身体をほぐして
空間や対人への緊張や拒否感を取り払う。一方で、そ
んなに急いで馴染まなくていいという考え方もあ
るだろう。手をつないだり、名前を呼び合ったりする
ゲームは楽しいけど「まあ、ゆっくり馴染んでいこう
じゃないか」というのがタマのカーニヴァルの現場で
あった。もちろん振り付けを覚える局面などは、まさ
に子供たちの身体に介入していったわけだが、学習的
な成果などを求めている場所ではないので、どうし
たってそれは「体験学習法」にはならない。子供たち
の身体的経験は子供たち自身の個人的経験としてある
だけで、それが個人の経験値となるかどうかはあずか
り知らぬ範疇であった。それは、はたから見るとひど
く心もとなく、達成感を欠いた状況となるのかもしれ

まっさらからはじめる

前提やルールがないまっさらな時間と場所というも
のをイメージしてみよう。私たちが暮らしている社会
にはベッタリと慣習や慣例や前例や偏見や先入観や、
何か動かしがたい共有されているイメージがある。例
えば二〇一五年夏のトピックであった安保法制に反対
するあのムーブメントを構成していた老若男女は、も
ちろん既存の運動体もいたけれども、従来の政治的セ
クショナリズム、イデオロギーの対立から解放され
た個人個人の集まりだったと考えてよいと思う。特権
化、限定化していた日本のデモ文化をリセットして、
それぞれの生活の場からのそれぞれの声という側面が
あったのではないか。自分が親になり子供を持つとき
を想像して、加害者となるかもしれない家族を想像し
て、自分たちの言葉を紡いでいったあのデモの是非を
ここでは問わない。しかしあの場が既成の運動をまっ
さらにして清濁併せ呑むかのような寛容性の賜物で



あったことは確かだった。

ちよつと話の事柄が大きかったかもしれない。では例えば家族の場合。この小さな単位のコミュニティにも、社会的イメージとしての「団欒」だとか「絆」であるとかが揺るぎない肯定的な価値観としてある。そういう家族像が、そうではない環境を持つ家族を苦しめていることはないのだろうか。あるいは学校では「できる子」「できない子」「勉強は苦手だけど〇〇が得意な子」みたいな評価のレッテルが確立されてしまっていて、無意識のうちに子供たちは自らをカテゴライズしていることはないのだろうか。「合唱はみんなと一緒に歌わなければならない」「リレーは一致団結して頑張らなければならない」「声は大きくハキハキしているほうがよい」というような価値観に違和感を持ったとするならば、それは学校の用意している正しい価値観からは外れているのだという自覚を持つことになる。それはそれでたくましく生きていくことができる子供だっているかもしれないけれど、みんながみんなそうではない。学校へ行かなくなる子供だっているかもしれない。とにかく社会に既に在る定まった価値観というものは、なかなか大きくて手ごわい。だからまっさらでまっ白なシーツに寝転ぶようにして、自分で価値を見定めていくために、いつもいるコミュニティを離れた時間と場所を用意したいのだ。タマのカーニヴァルは道筋の定まったワークショップから離れて、何がおもしろくて、何がつまらなくて、何をしたらあの子を傷つけて、何をしたら自分が悲しくなっ、何をしたらあの子は喜んでくれて、何をしたら自分が楽しいかを、子供も大人もアーティストも手探りしていた時間と場所だった。きっと、社会的規範をリセットしてもう一度組み立てることをしていたのだ。もしかしたら、うんと昔の大昔の民主主義のはじまりみたいなことをしていたのかもしれない。民主主義のレッスンと言ったら大げさだろうか。そして、バラバラといろんな価値をすり合わせて対話するための言葉として、歌があつて、踊りがあつたのだ。そこにあるのは、鼓舞するダンスでも癒しの音楽でもなく、言葉以前の人と人がかかわりをもつための触媒としてのそれだ。人と人とのかわりを強いるのではない寛容性としてのそれだ。

そういうなんともアナーキーな時間を経ておこなわれたタマのカーニヴァルのフィナーレは、祝祭として子供たちを歓呼させたし熱狂させた。祝祭的な非日常

性があつたがゆえに、あの十数回を超えたタマのカーニヴァルの日常は一層際立つて存在したのかもしれない。そしてあの非日常的なはずのパレードや発表で見える光景が、日常的な十数回とそれほど変わらないというパラドックスは、当の子供たちにとってはパラドックスでもなんでもなくて、非日常的なアートの表現が子供たちにとっては気負う対象でも特別視する対象でもない日常そのものになっていったということだ。そうやって子供たちはやすやすとアートにはびこるイメージも言説も超えていく。さて、大人の私たちはそれをどうやって超えていこうか。どうやって届かない先に届けようか。

とだて、まさふみ——一般財団法人地域創造・芸術環境部勤務。月見の里学遊館・企画スタッフ/アートマネージャー(二〇〇七-二〇一二)、NPO法人アートフル・アクション・制作、アーツカウンスル東京・調査員(二〇一二-二〇一四)、アーツ前橋・教育普及担当学芸員(二〇一四-二〇一五)を経て現職。日本文化政策学会、演劇人会議各会員。共著に「芸術と環境」(二〇一二)、論創社などがある。



タマのカーニヴァル 開催の記録

タマのカーニヴァルは二〇一三年度東京都多摩・島しょ広域連携活動助成事業 子ども体験塾事業として小金井市を拠点に実施した参加体験型プログラム。

武蔵野市、三鷹市、小金井市、国分寺市、国立市の五市に在住在学の小・中学生一〇〇人を公募し、七ヶ月間、月二回(原則)のワークショップと成果発表をおこなった。

【二〇一三年】
七月二七日(土)

- 第一回 小金井市民交流センター市民ギャラリー
- 第二回 八月六日(火) 小金井市民交流センター小ホール
- 第三回 八月二二日(木) 小金井市民交流センター小ホール
- 第四回 九月七日(土) 小金井市立第一小学校体育館
- 第五回 九月二二日(土) 小金井市立はげの森美術館
- 第六回 一〇月二二日(土) 小金井市民館本館
- 第七回 一〇月二六日(土) 小金井市役所第二庁舎八階
- 第八回 十一月九日(土) 公開ワークショップ
東京学芸大学芸術館
- 第九回 十一月三〇日(土) 小金井市立はげの森美術館
- 第一〇回 十二月七日(土) 小金井市立はげの森美術館

- 【二〇一四年】
第一回 一月二二日(土) 小金井市立はげの森美術館
- 追加WS 一月二二日(日) 小金井市立はげの森美術館
- 第二回 一月二二日(日) 小金井市立はげの森美術館
- 追加WS 一月二二日(日) 小金井市立はげの森美術館
- 追加WS 一月二二日(日) 小金井市立はげの森美術館
- 第一三回 二月八日(土) 小金井市民交流センター小ホール
- 追加WS 二月九日(日) 小金井市立はげの森美術館
- 第一四回 二月一五日(土) 市民交流センターの練習室二・三
- 追加WS 二月一六日(日) 小金井市立第二小学校体育館
- 本番 二月二二日(土)、二三日(日) 小金井市立第二中学校を
出発、小金井市立第一小学校にて休憩、武蔵小金井駅南口フェスティバルコートにてパフォーマンス、小金井市民交流センター小ホールにて成果発表

タマのカーニヴァル はげの森美術館ワークショップ

【夏編】
日時：二〇一三年八月七日(水)

講師：港大専、森の楽団ほか

会場：小金井市立はげの森美術館およびその周辺

【冬編】

対象：武蔵野市、三鷹市、小金井市、国分寺市、国立市に在住・在学の小中学生及びその保護者

日時(全二回)：二〇一四年一月二二日(土)、一八日(土)

講師：平井航、鎌田尚子

二月二二日、二三日に開催したタマのカーニヴァル大行列に身につける仮面や衣装、人形などを、美術作家たちと一緒に作るワークショップを開催。



子ども体験塾事業として

武蔵野市、三鷹市、小金井市、国分寺市、国立市の五市に在住在学の小・中学生一〇〇人を公募し、

【二〇一四年】
七月二七日(土)

- 第一回 小金井市民交流センター市民ギャラリー
- 第二回 八月六日(火) 小金井市民交流センター小ホール
- 第三回 八月二二日(木) 小金井市民交流センター小ホール
- 第四回 九月七日(土) 小金井市立第一小学校体育館
- 第五回 九月二二日(土) 小金井市立はげの森美術館
- 第六回 一〇月二二日(土) 小金井市民館本館
- 第七回 一〇月二六日(土) 小金井市役所第二庁舎八階
- 第八回 十一月九日(土) 公開ワークショップ
東京学芸大学芸術館
- 第九回 十一月三〇日(土) 小金井市立はげの森美術館
- 第一〇回 十二月七日(土) 小金井市立はげの森美術館

- 【二〇一四年】
第一回 一月二二日(土) 小金井市立はげの森美術館
- 追加WS 一月二二日(日) 小金井市立はげの森美術館
- 第二回 一月二二日(日) 小金井市立はげの森美術館
- 追加WS 一月二二日(日) 小金井市立はげの森美術館
- 追加WS 一月二二日(日) 小金井市立はげの森美術館
- 第一三回 二月八日(土) 小金井市民交流センター小ホール
- 追加WS 二月九日(日) 小金井市立はげの森美術館
- 第一四回 二月一五日(土) 市民交流センターの練習室二・三
- 追加WS 二月一六日(日) 小金井市立第二小学校体育館
- 本番 二月二二日(土)、二三日(日) 小金井市立第二中学校を
出発、小金井市立第一小学校にて休憩、武蔵小金井駅南口フェスティバルコートにてパフォーマンス、小金井市民交流センター小ホールにて成果発表

タマのカーニヴァル はげの森美術館ワークショップ

【夏編】
日時：二〇一三年八月七日(水)

講師：港大専、森の楽団ほか

会場：小金井市立はげの森美術館およびその周辺

【冬編】

対象：武蔵野市、三鷹市、小金井市、国分寺市、国立市に在住・在学の小中学生及びその保護者

日時(全二回)：二〇一四年一月二二日(土)、一八日(土)

講師：平井航、鎌田尚子

二月二二日、二三日に開催したタマのカーニヴァル大行列に身につける仮面や衣装、人形などを、美術作家たちと一緒に作るワークショップを開催。



の「アート」が氾濫する今日において、いま一度、わたしたちの知覚や思考の祖先に立ち返ってみましょう。同時に、わたしたちの幼年期の記憶やそれ以前の出来事までをも辿ってみましょう。とりまなおさずそれは、可能性と不可能性という二本の糸が撚り結ばれた、縄文の「縄」のようなものであるのかもしれません。

ヒトはなぜ、うたをうたうのでしょうか。
ヒトはなぜ、おどらずにはいられないのでしょうか。
そのヒントは、撚ること、編むこと、織ることにあるでしょう。
線を描くこと、土を捏ねること、石を磨くことなど、
そのような古代人の豊かな身体技法に、
リズムの始まりを感じることが出来るはずです。
—— 港大尋

会期中のイベント

ワークショップ《縄文編布の制作》

要申し込み/定員10名
からむし・あかそ・大麻などの植物の繊維を素材とした日本最古の布「編布」づくりを体験。

日時：二〇一四年三月一日(土) 一一:〇〇—一六:〇〇
講師：尾関清子(縄文編布研究者 東海学園女子短期大学教授)

レクチャー

《はじまりの造形—まねること・くりかえすこと—リズムの起源》
布を編み、土器や土偶を作る身体(からだ)の所作や縄文時代の儀礼、儀式からリズムの起源を、また、乳幼児から子供期の活動、身体の所作にある人の原初的な可能性を探る。

日時：三月一日(日) 一〇:〇〇—一六:〇〇
レクチャー：尾関清子(前出)、渡辺公三(文化人類学 立命館大学教授)、樋口誠司(考古学 井戸尻考古館館長/山麓考古同好会)、島亨(言叢社編集者/縄文造形研究会/本展覧会アドバイザー) 座談会：港大尋(進行)

トーク(タマのカーニヴァルとは何だったのか?)
日時：三月二日(金) 祝日 一四:〇〇—一六:〇〇
一 縄文・宗悦・反アートの系譜学 港大尋(前出)
二 タマのカーニヴァルをふりかえって
戸館正史(タマのカーニヴァル制作担当)

参加アーティスト

港大尋—総合ディレクター、音楽家

バンド「ソシエテ・コントル・レタ」を率い、詩人やダンサーとのコラボレーションなど幅広いフィールドで演奏活動をしながら、作曲家として合唱曲、器楽曲、劇音楽、ダンス音楽やCMなどの作曲作品を書き、同時に、シンガーソングライターとして活動する。代表作に「嘘を閉じれば無重力の声色が」「混声四部合唱と室内オーケストラ)、「ディアスポラ」(ピアノソロ曲)、「オペラ・美女と野獣」「琉球版」などがある。CD作品に「ソシエテ」(5枚)、「金時鐘」「届くことのない12通の手紙」「がやがやのうた」「声とギター」など。また、東京芸術大学や京都造形芸術大学、有明芸術短期大学などで講師を務めながら、小学校や特別支援学級、児童養護施設などでワークショップやライブをおこなう。著書に「記憶表現論」(共著)がある他、評論などをさまざまな媒体に寄稿。考古学・民俗学・人類学などの視点から、芸術全般を捉え直すような作業を続けている。ファンンから発想するブラックミュージック論、オルタナティブな民藝を志向する柳宗悦論などをながく構想中。(※この項 開催当時)

金井圭介—サーカス・アーティスト

多摩美術大学芸術人類学研究所特別研究員/東京都公認ヘブナーアーティスト/まつもとジャグリングクラブ代表。東京都多摩市出身。お雛子、大道芸、海洋写真家アシスタント、バンドマイム劇団を経て渡仏。二〇〇二年フランス国立サーカス大学(CNAC)を卒業し、フィリップ・デュクフレ演出のサーカス(CYRUS)に出演。二年間のツアーを経てフランス人とのデュオOlivier Haikudanを結成しヨーロッパ、中東、アフリカなど三十六ヶ国で公演をおこなう。ベルリンのサーカスグループやフランスのダンスカンパニーとのコラボレーションなど多数。二〇〇九年に帰国後、四人組のサーカスパフォーマンスグループ「くるくるシルクDX」のメンバーとして静岡大道芸ワールドカップ、大須大道町人祭、ヨコハマ大道芸祭、ヨーロッパ、アジアなど各国のフェスティバルに招待参加。ソロ活動として、札幌芸術の森、越後妻有アートトリエンナーレ、箱根彫刻の森美術館、横浜Baitati、世田ヶ谷パブリックシアター、茨城アークスプロジェクト、丸亀市猪熊弦一郎美術館、バナソニック汐留ミュージアム、まつもと市民芸術館などでアートプロジェクトやワークショップ、パフォーマンス、子供たちや市民との共同制作などもおこなう。奇想天外パフォーマンス。現在、長野県松本市在住。

ソシエテ・コントル・レタ

港大尋、澤和幸、大村太一郎、清水達生
ロックやブルース、ジャズなどをベースとしながら、邦楽、沖縄、アラブ、アフリカなどのミュージシャンたちと共演し、また、金時鐘、季村敏夫、細見和之、守中高明ら多くの詩人とセッションを重ねてきた。子供たちとの作品づくりも多く、「タイコを叩こう」動物の教え、「縄文ミュージカル」「蛇ん兵衛屋敷」などのミュージカルで共演する。「リズムを通して他者」という関わりあいひびきあうかのような問題系に力点を置きながら、単に消費されるだけの音楽とは一線を画しスロー過ぎるくらいにスローに活動中。なお「ソシエテ・コントル・レタ」とは、私の人類学者ビエール・クラストル(一九三四—一九七七)の書名邦訳タイトル(国家に抗する社会)「渡辺公三訳」に由来する。

澤和幸—ギタリスト

「ジャズライフ」編集を経て、世界中の様々なミュージシャンから影

響を受ける。故・浅川マキ、荒巻茂生などと共演。

大村太一郎—ベシスト
エレキ、コントラバスの他チェロや打楽器も。朴保バンド、デリシャスウィートス、ソシエテ・コントル・レタなどに在籍。

清水達生—ドラマー

故・古澤良治郎にジャズドラムを、関栄治にチャングを師事。国分寺エクスペリエンスの他、朴保バンド、ソシエテ・コントル・レタなどで活動中。

森の楽団—タマのカーニヴァルにて結成

タマのカーニヴァルで演奏したり、物語づくりを一緒におこなう楽しい楽団。笛やタイコ、弦楽器などを軽やかに、時に重厚にかき鳴らし、森や草はら、街なか、学校を駆けめぐり子供たちと一緒に演奏します。港大尋、澤和幸、大村太一郎、清水達生(ソシエテ・コントル・レタ)と、フルート奏者の亀田奈美子ほか、多彩なゲストで構成される。
亀田奈美子—フルート奏者
東京芸術大学教育学部特別教科教育音楽科フルート専攻卒業。オーストリアTirrer Landes Konservatorium に留学。フルートを三村園子、堀井恵の各氏に、フルートトトラベルンを菊池香苗氏に師事。第一一回日本クラシック音楽コンクール第三位。社会福祉法人東京サレジオ学園職員を経て、現在小金井カメダフルート教室主催。小学生から七〇代までの方々と「生楽しめる音楽を」をテーマに、フルートのレッスンを展開中。木管五重奏団「KitekiteQuintet」[Dragon manaの赤ちゃん連れOK! jazz live]「和太鼓市」メンバー。幅広いジャンルでの演奏活動をおこなっている。

平井航—人形遣い/人形師

一九七九年生まれ。東京都立大学卒業後「江戸糸あやつり人形 結城座」に入門。二〇一三年退座。その後、個人劇団「糸操り 航座(かわらざ)」や他団体への客演(人形遣い及び役者)で活動中。日本舞踊を西川鯉之祐(西川流) / 謡曲仕舞を粟谷能夫(喜多流) / 常磐津を常磐津文字兵衛(五世) / 能面製作を長澤重春(長澤流三代目)に師事。

猪股桃絵—ダンサー

幼少時よりクラシックバレエを習い、ヒップホップ、ジャズ、コンテンポラリーダンス、ワールドダンスと様々なジャンルの踊りを学ぶ。音楽とその場にあるものをとらえながら即興で踊ることを得意とする。現在は「踊るように語り、語るように踊る」ことをテーマに即興ダンスと弾き語りを組み合わせたエキゾチックなライブを中心に活動している。

特定非営利活動(NPO)法人アートフル・アクション

アートと出会った人が自分自身の新しい可能性を発見し、豊かな生き方を目指していくきっかけを提供する機会をつくることを目指し、市民、自治体、学校、他のNPO、企業などと連携しながら、地域における「アート」の可能性を追求している。二〇一一年発足。

「タマのカーニヴァル はげの森展」の参加アーティスト

(※所属、肩書きは開催時当時)

八木橋信吉 写真家 元国画会会員

辻忍 彫刻家

木彫を中心に、人とかかわりを主題にして制作を続けている。「切る」「繋がる」、この相反することが調和することを目指している。生きている美術を追求する彫刻家。

尾関清子 縄文編布研究 東海学園女子短期大学名誉教授

著書『縄文の布―日本列島布文化の起源と特質』(雄山閣二〇一二年)、『縄文の衣』(学生社一九九六年)

渡辺公三 文化人類学 立命館大学大学院教授

著書『身体・歴史・人類学 1,2』(言叢社二〇〇九年) 『闘うレヴィーストロース』(二〇〇九年平凡社新書)

樋口誠司 井戸尻考古館館長

共著『光の神話考古』(言叢社二〇〇八年)

島亨 言叢社編集者 縄文造形研究会 本展覧会アドバイザー
編著『神々の発光―中国新石器時代紅山文化玉器造形』(言叢社二〇三年) 『フクシマ―放射能汚染に如何に対処して生きるか』(言叢社二〇一二年)

藤原安紀子 詩人

詩集『音づれる聲』(書肆山田二〇〇五年) 歴程新鋭賞受賞 『アナザミミクリ』(書肆山田二〇一三年) 第三一回現代詩花椿賞

松村拓海 フルーティスト

スタンダードなジャズからフリージャズ、即興、ロックバンドやポップスまでをカヴァー。DVD『松村拓海のジャズフルート入門』(二〇〇八年インクス)

伊藤寛武 フルーティスト

ユニット「アワーハウス」を中心に、作曲家兼フルーティストとして、従来のジャンルや演奏場所を飛び越えて音楽をつくっている。

発行

二〇一五年一〇月三〇日

はじまるよつてはじまらなら、でもはじまっている

タマのカーニヴァルの言葉―Documentation 2013,7-2014,3

発行者

特定非営利活動法人アートフル・アクション
東京都小金井市本町六五―三 シヤトー2F

電話：〇五〇三六二七九五三 | mail@artfullaction.net

図書設計・写真

松田洋一

本書は無断複写・複製・転載を禁じます。

©2015 npo artfull action